

NEWSLETTER No.117 **TŌYŌ ONGAKU GAKKAI KAIHŌ**
ISSN 1340-5578 The Society for Research in Asiatic Music January 25, 2023

一般社団法人 **東洋音楽学会** 会報 第**117**号

発行 一般社団法人東洋音楽学会
事務所 〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル307号 TEL/FAX 03-3832-5152
●E-mail : LEN03210@nifty.com ●ホームページ : http://tog.a.la9.jp

目次

新会長挨拶	1	西日本支部からのお知らせ	13
第73回大会レポート	2	沖縄支部からのお知らせ	14
通常理事会・総会議決事項のお知らせ	9	東洋学・アジア研究連絡協議会への参加について	14
臨時理事会議決事項のお知らせ	9	ICTM(国際伝統音楽学会)に関するお知らせ	14
監事の被選挙権休止にかんする規定の改定について	10	RILM(音楽文献目録)委員会からのお知らせ	15
最新メールアドレス登録のお願い	10	会員異動	15
第40回田邊尚雄賞アンケートのお願い	10	図書・資料等の受贈	16
会員の受章・受賞	11	新刊書籍	16
文化庁芸術祭参加公演募集並びに贈賞終了について	11	新発売視聴覚資料	17
会費納入のお願いと会費割引制度のお知らせ	12	編集後記	18
機関誌編集委員会からのお知らせ	13	第11回定時社員総会議事録(抄)・添付書類	19
東日本支部からのお知らせ	13		

新会長挨拶

小塩さとみ

役員改選にともない会長という大役をつとめることとなりました。微力ではありますが、学会のために力を尽くしたいと思っております。2年間どうぞよろしくお願い申し上げます。

東洋音楽学会は、昭和11年(1936)に設立された歴史ある学会です。日本の伝統音楽をはじめ、ひろく世界中の民族の音楽を対象として、さまざまな視点から音楽を研究する会員が集まっています。音楽に対する多様な視点をもつ会員が相互に研究を発表し議論できる点が本学会の大きな特徴です。国際伝統音楽学会(ICTM)に国内委員会として加盟し、国際的な研究活動とのつながりもあります。私自身も本学会の活動を通して、多くの研究仲間と知り合い、また音楽研究に対する新しい視点を得てきました。

長い歴史をもつ本学会にとって、良き伝統を保ちつつ、時代の変化にどう対応するかが大きな課題です。前期の理事会で将来構想検討委員会が設置され、現在の学会が直面している課題と解決策について検討が行われました。福岡正太前会長から受け取った「東洋音楽学会の将来構想について」とい

う文書には、会員減少による学会収入の減少に加え、日本の大学の研究環境の悪化により、会員が学会活動に使える時間や労力も減っているという現状分析と、学会の運営を合理化しつつ研究活動を活発化させ、社会に対して東洋音楽研究の存在を発信する必要性が述べられていました。具体的な解決策も提示され、その実施については今期の理事会に託されました。すぐに対応できるものから、慎重な協議が必要なものまで内容は様々ですが、理事の方々と協力して進めていきたいと思っております。

電子化の促進、学会情報の迅速な発信などが直近の課題です。また例会や大会についても、オンライン参加という新しい選択肢が生まれ、今後の在り方を検討していくことになるでしょう。会員のみなさまからもご意見があればぜひ伺いたいと思っております。より充実した学会となるようご協力をお願い申し上げます。

第73回大会レポート

(2022年11月12日～13日 国際基督教大学 オンライン
および対面によるハイブリッド開催)

第1日(11月12日)

◇ICU 宗教音楽センター共催 公開講演会

「日本のオルガン」

講演者：金澤正剛

司会：マット・ギラン

本講演会では、西洋古楽の研究者であり本学会員である国際基督教大学名誉教授の金澤正剛氏が登壇され、日本の、とりわけ東京という地域に焦点を当てたかたちで、オルガンの設置や製作という観点を含めた具体的で明快なお話をいただいた。

当日の配付資料では、1) 日本のオルガンに関する年表および、2) 日本(20世紀製)のオルガン4事例(1918年南葵奏楽堂;1928年東京藝術大学移設、1973年NHKホール、1974年神奈川県立県民ホール、1986年サントリー・ホール)と、3) ヨーロッパのオルガンを4事例、15世紀イタリア、17世紀ドイツ、19世紀後半フランス、18世紀スペインを示された。これによって、オルガンという伝統的かつ総合的な楽器がもつ多様な姿を、西洋と日本の事例から俯瞰することができた。

16世紀後半にイエズス会の宣教師たちによって日本にキリスト教が布教されて以来、一旦キリシタン禁制によって交流が途絶えたものの、明治期になり再び宣教師たちによって、まずリード・オルガンがもたらされ、そしてアメリカやドイツから輸入されたパイプ・オルガンが日本の教会でも鳴り響いてゆく経緯が、教会などの建造物とともに紹介された。

パイプ・オルガンは建造物とあいまって聴衆が集う場を生み出すことが興味深い。その事例が、フィラデルフィアの百貨店をモデルにした三越百貨店内のオルガン設置(1930年)であろう。金澤氏の語るように「折にふれての演奏ばかりでなく、ラジオによる全国放送を通して、キリスト教とは無関係の一般市民にオルガンという楽器の存在を知らしめた功績

は大きい」(大会パンフレットより)。こうした教会以外でのオルガン演奏は、後の公共ホールでのパイプ・オルガン設置に向けての第一歩となったのかもしれない。

国産のオルガン製作は、1932年に木岡英三郎氏指導によるオルガンが聖テモテ教会に設置されたことを始まりとして、現代に至る国内でのオルガン製作の流れがあることを理解した。ここで注目したいのが個人の工房という伝統的な形式での製作であろう。楽器製作という観点で、西洋のものづくりと同様に、日本のものづくりにおける匠のわざを通じて、日本における西洋音楽受容を考えるのも、人間の身体と直接つながる楽器ならではのことでないか、と考えられた。

永原恵三

◇ICU 宗教音楽センター共催 公開演奏会

「日本のオルガン音楽」

オルガン：岩崎真実子

助演：菅哲也

今回の公開演奏会はICU 宗教音楽センターとの共催で開催され、「国際基督教大学オルガン演奏会第336回」とプログラム冊子に記されていたことから、長い年月にわたってこのオルガンが演奏され続けたことがわかる。楽器はやはり生き物であるので、使われなければ朽ち果ててゆく。日本のオルガンは本オルガンのように幸せな姿で使われているのか、心配でならない。

「日本のオルガン音楽」と題されたこの演奏会のプログラムは、聴き手を十分に満足させてくれるものであった。J.S.バッハに始まり、F.メンデルスゾーンで締めくくられる流れは、ドイツのオルガン音楽の王道であり、その音によって構築される構造物は演奏者の技術と相まって、この礼拝堂の音空間を開き、この日のテーマである日本のオルガン音楽をいざない、そしてその重厚なとびらを閉じるに相応しい選択であった。

4人の日本人作曲家による作品が演奏された。以下作品名は略すが、プログラム前半は、まず、柿沼唯の作品で、これはグレゴリオ聖歌の〈サルヴェ・レジーナ〉を主題として、



マット・ギラン大会実行委員長の挨拶(於ICU礼拝堂)



金澤正剛氏の講演(於ICU礼拝堂)

大オルガンと小オルガン(ポジティブ・オルガン)の2台で演奏された。続いて尾高惇忠の作品はパリのノートルダム大聖堂で初演されたもので、いずれも西洋音楽の基盤の上で展開された作品である。プログラム後半は、白鳥仁による《津軽木挽歌》で、民謡の旋律が用いられており、続く溝上日出夫の《雲中供養菩薩樂》は平等院での菩薩が楽器を演奏する印象を表現した作品であり、日本の音楽素材や仏教的素材に基づくものである。

〈サルヴェ・レジーナ〉は今も歌い継がれる聖歌であり、日本の各地域に歌われる民謡と同様にキリスト教で伝承された「歌」である。また、何らかの表現媒体に触発されることも音楽作品が生まれる契機となる。今回演奏された4曲は、日本におけるオルガン音楽がもつ、西洋と日本それぞれの伝統と歴史的な流れへの多様なアプローチの表われと考えられる。岩崎真実子氏の見事な演奏によって、バッハとメンデルスゾーンの古典的なオルガン演奏とともに、日本のオルガン音楽の多様さを味わうことができ、本学会にとって実に相応しい味わい深い演奏会であった。

永原恵三

◇第39回田邊尚雄賞授賞式

受賞者：佐本英規

受賞対象：『森の中のレコーディング・スタジオ—混淆する民族音楽と周縁からのグローバリゼーション—』

田邊賞授賞式は田中多佳子氏の司会により行われた。授賞対象は、佐本英規氏の『森の中のレコーディング・スタジオ—混淆する民族音楽と周縁からのグローバリゼーション』(昭和堂 2021年)であった。大内典選考委員長の代理として飯野りき選考委員によって、授賞理由、選考経過が述べられた。詳細については会報第115号を参照されたい。福岡正太会長から賞状と賞金の授与がなされ、受賞者の佐本氏によるスピーチが行われた。

佐本氏は、2009年に調査を始めて以来2021年に本書を出版するまで調査地で多くの方々の協力を得たこと、調査・研究・出版に至る過程ではソロモン諸島で出会った方々にさまざまなことを教えられたことを強調され、この賞もソロモン諸島の友人たちにも向けられたものだと考えていると述べた。さらに今後はこの賞に恥じない研究活動を継続していきたいという表明もなされた。

続いて小西潤子氏が、佐本氏の著作をアレアレのパンパイプに関する予備調査と本調査の成果を存分に活かした民族誌の力作として位置づけた上で、音響研究を重視した田邊尚雄の業績を記念する学会賞の受賞を心からお慶びしたいと祝辞を述べた。小西氏は、沖縄海洋博公園・海洋文化館の展示を手掛けた際にアレアレの竹製パンパイプの展示を構想し、その過程で佐本氏の協力を得た経緯についても触れた。協働作

業の経緯からは、佐本氏が現地で良好な人間関係を形成してきたことに加えて、楽器製作を人々の生活の中でのモノづくりと捉えて研究してきた姿勢、CD録音なども通して多くの人々との音楽的な出会いを大切にしてきた姿勢が示されたと述べ、そうした点に感銘を受けたことが強調された。

以上を経て対面・オンライン双方の参加者からの拍手のもとで授賞式が完了し、夜の祝賀会に引き継がれた。

福岡まどか



田邊賞受賞者の佐本英規会員(右側、於D館オーディトリウム)

第2日(11月13日)

◇研究発表1-A

〔共同発表〕日本帝国と植民地朝鮮の音楽交差—音楽の調査・移動・移植の観点から—

発表者代表：金志善

発表者：植村幸生、ケビン・マイケル・スミス(非会員)

本セッションは第71回大会に引き続き、金志善氏が代表となって行った国際的な共同発表である。前回は日韓共同であったが、今回は日韓米の研究者3名によるものである。

最初に金志善氏が本研究の趣旨説明を行った。植民地朝鮮の音楽文化の理解には、「抵抗する政治」の観点だけから捉えられない事象についても積極的にアプローチする必要性を説き、本研究の目的を「日本帝国と植民地朝鮮のさまざまな音楽交差の局面を、音楽の調査・移動・移植に焦点を当てながら探ること」に置いた。

続いて、植村幸生氏が「調査」の観点から、「兼常清佐の朝鮮音楽認識」について考察した。田邊尚雄の朝鮮音楽調査(1921)は日韓で知られるところだが、植民地期朝鮮の初の現地調査(1913)を行った日本人音楽学者である兼常についてはほぼ忘れられている。植村氏は兼常の朝鮮音楽研究の内容と朝鮮音楽観を、兼常の言葉を引きながら明らかにしていた。そして、彼の朝鮮音楽研究が埋もれてしまったのは彼自身が沈黙を守ったことに大きく起因すると述べ、その理由として兼常の研究関心が言語と音楽の関係にあり、自身が朝鮮語を解さなかったからではないかと結んだ。

次に、ケビン・マイケル・スミス氏が1930年代のソウルと東京の二つの都市で歌われた大衆歌謡に焦点を当て、「越境文化」の事例に言及した。藤山一郎の《東京ラブソディー》と金海松の《花ソウル》について、SP音盤の音源を聴かせながら、メロディー、歌詞、文化的背景による比較考察を行った。同時代のソウルと東京の音楽文化が、越境によってパラレル化している現象を実証的に説明した。

最後に金志善氏が、1927年に開局した京城放送局(JODK)の音楽番組が日本音楽、朝鮮音楽、西洋音楽、中国音楽から構成されていたこと、日本音楽を朝鮮人が担っていた事例(都々逸、筑前琵琶、浪花節他)、朝鮮音楽を日本人が担っていた事例(新民謡)を挙げて、在朝鮮日本人と朝鮮人の「音楽交差・移植」の側面を明らかにした。

フロアからは、「研究テーマの観点となっている移動と移植の違い」、「植民地朝鮮で朝鮮語と日本語の二つの言語が使用されることをダイグロシヤ(diglossia)と表現することの妥当性」、「朝鮮語浪花節が放送された時期が1940年以降であることと皇紀二千六百年との関連」、「朝鮮語浪花節に盛り込まれた内容」について質問がなされた。

本セッションは、対面(日本)とオンデマンド(アメリカ)を組み合わせたハイブリッド式の発表であり、時差のあるアメリカからの参加を可能にする妙案であった。英語による発表動画には日本語表記が付されており、パワポ資料も配信されたが、英語の聴解に慣れていない聴き手のために日本語の要旨が別途用意されていたら、より深い理解が得られたのではないかと期待される。

山本華子

◇研究発表1・B(司会:小日向英俊)

民俗バラライカの現在—レパートリーを中心に—

発表者: 柚木かおり

柚木氏の発表は、ロシアのバラライカとその音楽を中心に据えた研究プロジェクトによる成果の一端である。コロナ禍に加え、戦渦における研究の状況についても冒頭で触れられた。それらの影響により、オンラインで実施したインタビューの詳細なデータが主な資料であった。発表では、インターネット世代であるアマチュア演奏者たちについてのデータ分析を通し、ロシアにおける伝統・民俗音楽の伝承状況と、それらの文化が社会主義・資本主義それぞれの考え方に根ざしている状態の分析に踏み込まれた。フロアとの質疑応答によって、音楽大学で伝統音楽を学んだ演奏者とアマチュア演奏者を隔てるロシア固有の事情や、世代交代が進むにつれて両者が歩み寄りつつある現状にも議論が展開した。プロジェク

トの全体像が大きいと非常に情報量が多かったが、調査データ自体がオンラインツールを駆使して収集・公開されているうえ、表の視認性が高く、Zoomを介して無理なく視聴できる発表であった。

辻本香子

『タブラー理論体系書』からみる18世紀のインドの打楽器演奏法

発表者: 井上春緒

現在北インド古典音楽の代表的な打楽器であるタブラーが、楽器が誕生した当初どのように演奏されていたのかについて、18世紀後半に書かれたペルシャ語の文献『タブラーの理論体系書』に基づいて考察した発表であった。タブラーの打音を表す唱歌や各打音の奏法が当時と現行とで異なる点、今日のタブラーの演奏で一般的に用いられているリズム型の祖型が文献の中に見出される点などが指摘された。

フロアからのコメントにもあったが、ラーガ理論の場合と同じように、タブラーの打音についても性別、時刻、方角、色といったさまざまな概念と結びつけて捉える考え方が文献の中で示されているというポイントは興味深い。またフロアから指摘があった通り、文献の成立年代や写本が作成された経緯についての正確な情報を得ることは難しいと思われるが、一次資料に基づく歴史研究の可能性を探る試みとして、今後のさらなる進展が期待される。

丸山洋司

長唄三味線の駒に関する歴史的研究—大正期から昭和期の文献調査を中心に—

発表者: 岩崎愛

本発表は、三味線の音色に大きな影響を与える駒に着目し、長唄三味線の実践における演奏家と楽器の密接な関わり的一端を明らかにするもので、副題が「大正期から昭和期の文献資料とインタビュー調査から」と変更された。

発表では、大正期から昭和期の文献から駒に関する記述を丁寧に洗い出すとともに、長唄演奏家4名へのインタビュー調査を交えて、駒についてさまざまな角度から検討が行われた。その結果、長唄の演奏に使用される駒は時代が下るにつれ低くなってきており、幅は広すぎない「シャクレ型」が好まれるという傾向が示された。また駒の掛け方については、演奏の条件や皮の張り具合、得たい音色などによって工夫されることも添えられた。

フロアからは、唄方の音高や弦の張力についても検討項目に追加できるのではないかと意見があった。他種目で使用する駒と比較することで、長唄で使用する駒の特性がより明確になるだろう。今後の研究に期待したい。

大久保真利子

◇研究発表2-A(司会:齋藤桂)

ディズニー・アニメーションとエキゾティシズムの問題

—《アナと雪の女王》における「サーミ的なもの」を例に—

発表者:松村麻由

民族的なマイノリティを「エキゾティック」な要素として取り入れることが多いディズニー・アニメーションの代表例として、2013年公開《アナと雪の女王》(以下《I》)と、2019年公開《アナと雪の女王II》(以下《II》)が取り上げられ、文化の流用という観点にそって北欧先住民族サーミに関わる表象が比較された。《I》ではサーミへの言及なしにサーミを想起させる視覚・聴覚的イメージが流用されている問題が示された。《II》については、実際にサーミ団体と協力して制作され作品内にそのクレジットがあるなどの点で《I》と大きな違いがあるとされた。特にヨイク、クルミンなどサーミの伝統的な音声実践の表象のされ方について具体的説明があった。

質疑ではディズニーの地球規模の影響力にかんがみて松村氏の研究を鼓舞する声があった一方で、エキゾティシズムをめぐる議論が踏まえられていないとの指摘があった。特に「映画制作者側がエキゾティシズムと折り合いをつけている」という結びは不明瞭だった。松村氏が何を問題として探究を進めるかを明確にすることが課題として浮かんだように思われる。

井上航

愛好者による民謡の継承—福岡と長崎におけるNHKラジオ放送局開局時の演奏者と現在の事例から—

発表者:安原道子

かねてよりの疑問点を明らかにする文献が見つかったためその内容を中心に発表すること、そのため発表題目にある「現在の事例」紹介は取り下げることが、冒頭に安原氏により告げられた。その文献とは主に井上精三編『NHK 福岡放送局史』(1962年)である。放送番組制作者側と聴き手による出演者に対する認識をこの文献から分析することが発表目的とされた。文献がいうところの「民謡」の「愛好者」として演奏水準の高い福岡の芸妓衆、主基斎田御田植歌を歌った福岡県脇山村の青年たち、福岡県各地の小学校の児童生徒たちがあったことなどが取り上げられた。

発表は文献中の多数の文言の忠実な引用・紹介が多くを占めた。昭和初期の「民謡」を取り巻く状況が一部生々しく垣間見られた。しかし引用の要点がほとんど示されず、安原氏が何に問題意識をもち、何が解明されたと考えているかが伝わらなかったのが残念だった。研究の全体構想を概略的に示し、本発表の意義と位置づけを示すことも必要だったのではないか。また質疑では安原氏において「民謡」の概念が不明確であるとの指摘があった。

井上航

日中映画における琵琶の文化像

発表者:曾煜媛

曾氏は、日中映画4篇における琵琶の用法を、演奏技巧と画面内容との対応を含めて分析し、「情緒的象徴」と「文化的象徴」の機能に大別できると報告した。質疑応答によれば、発表の背景は、母国で中国琵琶を専攻し日本で薩摩琵琶を習得中であることと、日本の琵琶が男性、中国琵琶が女性のジェンダーを象徴すると考えたためという。フロアからは、ジェンダーに関し慎重な判断が必要と助言があった。また日中の琵琶が、文化的な差異と無関係に似た奏法で同じ情感を喚起するならば、より微細なレベルで感覚の差異を比べる提案もなされた。筆者は、特定楽器の「文化的象徴」機能はいわば自明の前提なので、その枠から外れた用法の有無にも目をむけてはどうかと感じた。また、『切腹』で作曲を担当した武満徹と、『犬王』で琵琶を監修した後藤幸浩は、琵琶の効果や用法を書籍やネットで公開済みなので、彼ら製作者の意図についても言及がほしかったと思う。

尾高暁子

◇研究発表2-B(司会:近藤静乃)

謡伝書「永正元年観世道見在判伝書」の音曲論

発表者:高橋葉子

本発表は、観世元広(第6代観世大夫、法名道見)による永正元年(1504)の奥書を持つ謡伝書(以下、道見伝書)における呂律の解釈を明らかにしようとしたものであった。まず、道見伝書の書誌、構成と内容、同系統本、先行研究への批判などが述べられ、次に、道見伝書における呂律の解釈が世阿弥の伝書と比較しながら考察された。世阿弥とは逆に、律を祝言、呂を愁いとする道見伝書の解釈は、近世初期まではある程度流布していたという。会場からは、雅楽との比較から、謡伝書の著者たちは楽書を見ていたのか、という質問があり、楽書の引用は見当たらず、記述もあまり理論的なものではない、という回答があった。

記録者は、中国や日本の楽書における音律論はこれまで取り扱ってきたが、謡伝書における音律論にはあまり注目したことがなかったため、興味深く聴講した。雅楽や能楽などのジャンルに囚われず、日本における音律論の受容の様相を考察する必要性を感じた。

高瀬澄子

『白石先生遺文』所収「律呂説」について

発表者:中川優子

本発表は、新井白石の遺稿集『白石先生遺文』(立原翠軒[1744~1823]編)所収の「律呂説」と呼ばれる短文を取り上げ、その内容や背景を明らかにしようとしたものであった。白石の雅楽関係の著作の中での位置づけ、理論の概要、参考

にした同時代の資料などが述べられた後、辻家の笙譜と照合しながら、「律呂説」の示す各調の音組織が検証された。「律呂説」は、白石自身の説かどうか不明である一方、理論的な知識だけでは書けない内容であるという。会場からは、同時代の資料や、白石の演奏経験、「律呂説」の文体などについての質問や意見があった。

「律呂説」自体も参考にした同時代の資料も、白石自身が書いたり見たりしたことが確実とは言えず、まだ研究の途上である印象を受けた。しかし、朝鮮通信使への対応で知られる新井白石の雅楽理解について新たな知見が開ける可能性を秘め、江戸時代の楽律研究の実態解明に向けて資するものがあると感じられた。今後の進展を期待したい。 高瀬澄子

R.ディットリヒ『Nippon Gakufu』第1集・第2集(1894:1895)における日本音楽

発表者：黒川真理恵

本発表は、R.ディットリヒ『Nippon Gakufu』第1集・第2集(1894:1895)所収の楽曲の元となった日本音楽は何かを明らかにしようとしたものであった。第1集所収の6曲、第2集所収の10曲のうち、出典楽譜が不明である9曲について、歌詞と楽譜を示しながら、類似の歌詞や旋律が認められる参考資料を元に検証が行われた。ディットリヒは主に木遣や俗曲を採譜したと考えられるが、原曲不明の曲もあり、さらなる調査を要するという。会場からは、G.プッチーニ《蝶々夫人》への引用に関する近年の研究の成果、伊勢神宮の式年遷宮の木遣などについて、指摘や質問があった。

個人的には、第1集の表紙の挿絵に興味を惹かれた。聴覚と視覚の両方から日本のイメージが形成されたことが窺えると同時に、楽譜の装丁にも様々な手がかりがあることが察せられた。なお、不明にして、《蝶々夫人》における日本音楽の引用については既に決着済みのものと思い込んでいたので、質疑の内容は新鮮であった。 高瀬澄子

◇研究発表3-A(司会：小塩さとみ)

秋田県における地元一曲民謡大会

—現代化した『民謡』の場として— 発表者：梶丸岳

梶丸岳氏は、地元を代表する民謡の歌唱を競う大会に着目し、秋田県下の諸大会を取り上げた調査を報告し、愛好者たちの交流とモチベーション維持装置として民謡大会が機能していると締め括った。

報告は、民謡大会が発生、展開してきた経緯を辿り、その間の世相、社会的背景、制作の主体性、参加者の実態、意識についての調査結果を報告し、多くは愛好者たちによって運営されていること、また、行政の補助の不足で消えていく大会がある一方、地元愛好者の熱意で新たに始まる大会もあること、大会は晴れ舞台として正装して威儀を正して臨むもの

とされていることなどが報告された。

質疑応答の中で、当事者は自分たちが正統と考えているので、研究者・評論家の審査参加を求めていること、コンクール用の歌い方はあることが報告された。また、受賞者のその後については、プロになる事例は少なく、趣味の活動の一環ということだった。 金城厚

伊勢大神楽をモチーフとしたわらべうたの伝承

発表者：神野知恵

神野知恵氏は、これまで伊勢大神楽の研究調査を重ねてこられているが、その過程で、大神楽を歌詞のモチーフとするわらべうたが滋賀県東部に分布することを知り、歌詞内容を調査したところ、神楽の芸能や神楽師たちの暮らしぶりについて歌に描かれていることがわかったという。そこで、歴博の日本民謡データベースなどを利用して調査の範囲を広げた結果、飛び地伝播も見られたことから、大神楽の広がりを示す可能性もあることが報告された。その多くは「ひとつお伊勢の……」で始まる数え歌の形式で残っているという。これを踏まえて、わらべ歌の数え歌が語り物の役割を果たしたとの見解が示された。

質疑応答では、一般的な数え歌としての展開という視点も広がりがあるのでは良いのではないかと、とのコメントがあった。民謡のデータベースをもとに研究が広がっていく好例と感じた。 金城厚

調査資料の保存管理と共有への展望—五島列島民俗音楽調査資料を例に—

発表者：福岡正太

福岡正太氏は、1964年に東洋音楽学会の後援で故山口修氏が行った五島列島民俗音楽調査の録音資料について、調査の背景や経緯を紹介しつつ、これが当時次々と行われていた民俗音楽調査とともに、悉皆調査の方法を確立した研究史上重要な意義を持つ資料集であることを指摘した。

また、この資料は国立民族学博物館に寄贈されて、先にデジタル化された東洋音楽学会調査記録資料と同様に、同館にてデジタル化が進行中であることが報告された。さらに、その運用、活用にあたっての著作権上の問題についても整理して問題提起され、今後の調査において留意すべき点が示唆され、きわめて有益な発表であった。

質疑応答のなかで、福岡氏から、既に調査した共同体と新たな関係性を構築しながらアクティブな働きかけをすることにより、過去の資料と未来の音楽活動とを結びつけることが、新たな研究の将来像として考えられるというアイデアが表明されたことが印象的だった。 金城厚

◇研究発表3-B

〔共同発表〕インド音楽世界における音楽家と演奏記録の統合的データベース構築とその可能性

発表者代表・司会：田中多佳子

発表者：岡田恵美、小尾淳、小日向英俊、
田森雅一、寺田吉孝

研究者6人によるインド音楽のデータベース構築に関する共同発表は、あらためてインド音楽の歴史と深さ、そして日本のインド音楽研究者の層の厚さを実感させる内容であった。発表は代表の田中氏による主旨説明に始まり、統合しようとする6つのデータベースについて概要が示された後、個々のデータベースを活用した研究として、田森氏による『音楽家名鑑(WWIM)』と『受賞者名鑑(SNA Award)』のデータベースを活用した定量研究に関する発表、岡田氏による『インド音楽百科事典(OEMI)』とインド国営ラジオ All India Radio の演奏録音リスト(AIR)のデータベースを活用したラーガの運用とくに規範化をめぐる発表、小尾氏によるマドラス音楽アカデミー Madras Music Academy (MAM) のコンサート・プログラムのデータベースを活用した作曲家・作品の「文化資源化」についての発表、小日向氏(録画)によるデータベースとインターネット資料(YouTube等)の接続に関する発表があり、最後に寺田氏がデータベース活用の可能性とデータベースから漏れる音楽実践や数字のトリック等の課題を述べて締めくくられた。

まずはここ10年来の共同研究の成果に大きな拍手を送りたい。PDFのテキストをすべて手入力してデータ化した時間と労力は計り知れず、その尽力には頭が下がる。その何万ものデータをデータベース化し、それらをかけあわせ、さらにインターネット資料とも繋げて利用できるようにする企図の大きさにも感服した。すでに公開されているデータベース(<https://idim-jp.org/>)に今回初めてアクセスしたが、研究者のみならず、音楽家、愛好家、世界中の誰もが興味・関心に応じて利用できる考えると、これからの展開も興味深い。

データベースの可能性もさることながら、私が興味をひかれたのは、ここまでプロジェクトを推し進めてきた「情熱」である。情熱の源の一つに研究上のニーズがあることは間違いない。発表の随所で質的研究と量的研究の往還が言及されたように、6人の研究者はそれぞれフィールドワークを通して個別の事象を研究してきているが、そこから生まれた問題意識と定量調査が合わさり、新たな研究の方向性が開かれるという。インドを全国的に俯瞰できることを始め、経年変化を追う、実態や傾向を明らかにする等、個別の発表からその具体例を聞くことができた。もう一つは、グループで取り組む共同研究の強みである。若い研究者も含めた共同研究は確実にお互いの研究の質を高めている。小泉文夫から始まる、

日本のインド音楽研究、グループによる研究がこうして継承され実を結んでいるのを見ると、羨ましくも学ぶところが多く、さらに国際的な研究グループ構築も視野に入れているのが気になった。

個々の発表はとても分かりやすくも、全体として90分では語り尽くすことが出来ない充実した内容で、最後にフロアを交えての議論には至らなかったため、また機会をあらためて発表を期待したい。

金光真理子

◇研究発表3-C

〔映像発表〕くるちの杜100年プロジェクト in 誼谷をめぐる6/100(2017-2022)年の記録

発表者：小西潤子

豊年祭を思わせるドラとともに始まる草刈り・植樹作業の合間に、仕掛け人・参加者の語り、子供の三線クラブ等が紹介される。「県産三線の魅力を伝えたい」という三線製作者のインタビューが印象的だ。はるか100年、200年先を展望する計画なわけだから、目的達成というよりは、そのプロセスから何が得られるかが重要だろう。内外の市民は、如何なる動機でこの運動に参加しているのか、やはり根底には音楽への関心があるのだろうか？フロアからも、県内の三線愛好者の動向について質問が寄せられた。

エンディングは記念音楽祭の演奏。フラとエイサー・島唄・ポップの混淆、沖縄音楽の多文化的な状況が映し出される。古典の「御前風」にのせて、テーマソング「くるちめ杜節」の文句がうたわれる中、重鎮から若手までの出演者が登場。まさに過去から未来へのバトンタッチだ。短いエピソードの積み重ねゆえ、脈絡が追いきい面もあったが、三線の現状への関心を喚起する作品だった。

酒井正子

◇研究発表4-A(司会：高松晃子)

ポピュラー音楽における感覚経験の検証—中米グアテマラ高地の事例をあげて—

発表者：滝奈々子

この数年に亘るコロナ禍はフィールドワークを前提とする音楽調査・研究に多大な影響を及ぼした。こうした中で滝氏の発表は、中米グアテマラ共和国において7年ぶりに可能となった現地調査に基づくものであった。グアテマラは人口や民族構成についても不確かなことが多い国であり、こうした地で主にマヤの人々にフォーカスし、フィールドワークをおこない、かつ「感性をいかに観察し記述するか」という魅力的なテーマに取り組んでいることをまずは評価したい。とはいえ、今回の発表ではZoomのアクセス不良、録画映像の視聴不良などが重なり、発表の核となるポピュラーカルチャー現象と「感性」をめぐる関係性やその表象、結論が明示されたとは言い難かった。発表時間が超過した結果、質疑応答の時間がとれなかったことも残念であった。今後の報告を楽し

みに待ちたい。

濱崎友絵

宗教儀礼における「歌唱の応答」の実践と役割—アレヴィーのテヴヒッドを例に—

発表者：鈴木麻菜美

鈴木氏の発表は、アレヴィーの宗教儀礼テヴヒッド(タウヒッド)の歌唱の応答と斉唱の役割についてであった。儀礼音楽家と信徒がコール&リスポンスで歌唱を反復することでエネルギーを高め、音域が高くなる斉唱部分で一体感を得る、というテヴヒッドにおける音楽の役割が指摘された。フロアからは、発表内容に関するオリジナリティの所在の確認、「エネルギーが爆発する」という指摘が発表者の考えかどうか、当事者たちはどのように感じているのかといった質問から、「一体感」のレベルの違いを念頭に入れて検討してみてもどうか、あるいは、エネルギーを蓄積するという観点からいえば、ズィクルとテヴヒッドの違いも身体動作を加味しつつ明示する必要があるのではないかといったコメントなどが寄せられた。また当該の儀礼形式で「信徒が共にエネルギーを高める」理由は何かという質問に対しては、アレヴィーが元来マイノリティであるがゆえにコミュニティ意識の強調という側面が関係しているのではとの回答があった。活発な質疑応答が交わされた発表となった。

濱崎友絵

「音文化」を軸に日本とアジアにおける共同開発へ—Glocal グローカルの落とし穴を埋める地域意識向上—

発表者：T.M.ホッフマン

ホッフマン氏の発表は、これまでの氏自身による日本とインドの両音楽にかかわる実践的アプローチの事例を総括する内容であった。かつてM.フッドは、複数の音楽様式に通じ実践できる能力の獲得をバイミュージカリティという用語で提示した。まさに氏は複眼的な視点と音楽能力の獲得によって、インドと日本の両音楽を、理論的かつ感性的に理解し、これを演奏実践や教育実践に接続させ、その地平を拓いてきたといえる。その方向性は多くの示唆を与えるものであった。ただし題目にある「Glocal グローカルの落とし穴を埋める地域意識向上」が具体的に何を指すのかが見えにくかったことは否めない。具体的な実践例をもう少し掘り下げて、身体的、感性的、理論的観点から論じられれば、本発表の趣旨がより説得的に伝わったのではないかと推察される。なお、本発表ではZoomでの操作に時間がとられ、質疑応答時間がきわめて限られてしまったことが悔やまれる。とはいえ現地会場からの指示と対応は的確で、その影響が最小限に抑えられたことも付記しておきたい。

濱崎友絵

◇研究発表 4-B (司会：遠藤徹)

江戸期吉原遊廓における「継節」の実態—その始まりと歌詞

—にかんする一考察—

発表者：青木慧

遊廓や遊女は日本の伝統芸能といかに関わり、その発展にいかんにかんしたのか。これまでの音楽史研究が余り省みなかった課題を、青木氏は一連の研究で正面から追跡してきた。今回の報告でも、吉原で流行した「継節」の実態について、柳亭種彦『用捨箱』の記述をもとに詳しく追究し、一定の成果を挙げたと高く評価できる。

質疑応答では、まず高橋葉子氏が室町後期の謡伝書に見える「継節」を紹介し、形式の名と思われることを述べた。これを受けて報告者は、「継節」には様々な形が存在した事が分かったので、各時代・各地の「継節」蒐集も今後の課題としたいと応えた。またステイーヴン・ネルソン氏は、「継節」と「忘れ唱歌」(上方唄)の関連について質問した。報告者は、随筆等には「忘れ唱歌」についての情報が少ないので、今後の課題であると応えた。

近世の演劇や文学の研究には相当の蓄積があるので、文献の利用に際してはそれらの参照も必要であろう。また随筆等による詞章研究に止まらず、一部伝存する音曲の調査を踏まえての研究が、日本音楽史として望まれるように思われた。

笠井純一・笠井津加佐

明治初年の雅楽改革と伶人の動向—春日大社所蔵「芝葛忠日記」を素材に—

発表者：山田淳平

山田報告は、これまで殆んど知られていなかった『芝葛忠日記』(春日大社蔵、明治7年)を用いて、南都の世襲的伶人が、洋楽兼修の開始など明治初年の雅楽改革、をどのように受け止め、かつ行動したかを紹介した上で、近代音楽史の全体像を描く橋頭保を築こうと試みた。実証的かつ示唆に富む興味深い内容であった。「家日記」の性格上、記主個人の感懐等は記されないことが多いというが、この日記に見えるのは近代化のなせる業であろうか。

質疑応答では、まず塚原康子氏が同時代伶人の東西往還について確認する質問を行った。報告者は、個別的な往還については今後確認すると応えた。続いて笠井純一が、(1)記主葛忠の立場と、(2)同時代の伶人全体の動向について質問した。報告者は(1)について、50歳位で南都楽人中の中心的人物であったと応えた。また(2)については、葛忠より早く退官して奈良に戻った伶人もあるが、世代による認識の相違も含めて他の伶人との対比を行い、同時代の動向について理解を深めたいと応えた。

笠井純一・笠井津加佐

1980年代における中国楽器奏者の来日とその背景

発表者：孫瀟夢

孫氏は、改革開放が進む1980年代に来日した中国楽器奏者を対象とし、来日の意志決定に影響を与えた両国の政治・

文化・留学制度など社会情勢を分析した。配布資料に掲載された調査対象は、1978年から1989年までの来日者55名(実質関東圏への移住・留学者)。第一期(1978-83)と第二期(1984-89)の主要な来日背景(要旨参照)に言及する際に調査方法の詳細は省かれたが、第二期の①1980年代に中国で放映された日本のTVドラマが巻き起こした現代日本への憧れや、②流入した台湾香港のポップスにおされ伝統音楽奏者の仕事が激減したことなど、改革開放を体験した当事者ならではの反応が確かに伝わった。

調査対象者の大半が留学生なので、留学政策と来日志望との相関を論じた留日中国人研究の先行例を援用すれば、分析結果がさらに説得力を増したと思われる。今後1990年代以降に対象を広げ、要旨に記された「現代日本に根ざす中国音楽の理解」をめざす上でも有効ではないか。 尾高暁子

通常理事会・総会議決事項のお知らせ

2022年10月10日(月)にWeb会議システムZoomを用いて第21回通常理事会が、また11月12日(土)に国際基督教大学(ICU)D館オーデトリウム、及びWeb会議システムZoomにて第11回定時社員総会が開催されました。以下にこれらの会議における議決事項のうち、特記すべきものをお知らせします。定時社員総会の議決の詳細は、後掲の第11回定時社員総会議事録(抄)ならびに添付書類をご参照ください。

1) 新入会員について

理事会において、前回理事会(2022年4月10日)以降に申し込みのあった正会員6名の入会が正式に承認されました。

2) 非常勤職員(定時勤務職員)就業規則の改定について

「高年齢者雇用安定法」の改正を踏まえて、非常勤職員(定時勤務職員)の定年に関する規定を満60歳から満65歳に引き上げることが理事会で承認されました。

3) 個人情報保護方針について

昨今の個人情報保護の重要性に鑑み、学会の個人情報保護方針を策定することが理事会で承認されました。

臨時理事会議決事項のお知らせ

去る11月13日(日)に国際基督教大学H-260教室及び

Web会議システムZoomにて臨時理事会が行われました。以下に、特記すべきものをお知らせします。

1) 役員の役割分担について

理事の役割分担、支部委員、各種委員、参事が以下のようになり決まりました。

理事

[会長] 小塩さとみ

[副会長] 遠藤徹

[東日本支部長] 早稲田みな子

[西日本支部長] 藤田隆則

[沖縄支部長] 小西潤子

[常務理事] 小日向英俊、近藤静乃、高松晃子、配川美加、増野亜子(兼広報)

[総務] 遠藤徹、小塩さとみ、小日向英俊(情報委員会担当)、近藤静乃(田邊賞担当)、増野亜子(兼広報)

[経理] 高松晃子、配川美加

[広報] 土田牧子、増野亜子(兼総務)

[機関誌] 梅田英春、竹内有一(兼西日本支部担当)、福岡まどか(兼西日本支部担当)

[東日本支部担当] 横井雅子

[西日本支部担当] 竹内有一(兼機関誌)、福岡まどか(兼機関誌)

支部委員

[東日本支部] 金光真理子、鯨井正子、鈴木良枝、田辺沙保里、仲辻真帆、濱崎友絵、福田千絵、伏木香織、ヘルマン・ゴチェフスキ、前島美保、森田都紀

[西日本支部] 大久保真利子、岡田恵美、神野知恵、斎藤桂、島添貴美子、竹内直

[沖縄支部] 高瀬澄子、塚原健太、三島わかかな

参事

[総務] 青木慧、小林美季子、齋藤徳歌、長澤文彩、根本千聡

[広報] 井上環、今泉佳奈、神田花菜子、西浦まどか、吉岡倫裕

[機関誌] 岸美咲

[情報委員会] 渕上ラファエル広志

[東日本支部] 岩崎愛、小尾淳、神村かおり、澤田聖也、清水(松浦)春菜、武田有里、長谷川由依、増田久未、村治学、山内弾正

[西日本支部] 細野桜子、吉岡倫裕

[沖縄支部] 小川恵祐、多和田真理

各種委員

- [機関誌編集委員会] 梅田英春、岸美咲、島添貴美子、竹内有一、中安真理、福岡まどか(委員長)
- [会報編集委員会] 井上環、今泉佳奈、神田花菜子、土田牧子、西浦まどか、増野亜子(委員長)、山下正美、山本華子、吉岡倫裕
- [情報委員会] 太田暁子、小日向英俊(委員長)、竹内直、塚原健太、仲辻真帆
- [国際伝統音楽学会(ICTM)] マット・ギラン
- [東洋学・アジア研究連絡協議会] 遠藤徹

2) 新入会員について

前回理事会(2022年10月10日)以降に申し込みのあった正会員2名の入会が承認されました。

3) 文化庁芸術祭の贈賞廃止の問題について

会長名で要望書を出すという方針が承認されました。詳しくは本号の関連記事をご参照ください。

監事の被選挙権休止にかんする規定の改定について

会報第114号でお知らせしました、理事・監事の被選挙権の休止にかんする規定の改定の件について、会員からの意見を踏まえて、理事会では下記の定款施行細則第13条の変更案を次の総会で提案する方向で検討を進めています。変更案では監事の任期は通算2期が上限、役員を通算8期以上務めた正会員の被選挙権の休止の申し出は理事のみとなります。この件について、ご質問やご意見のある方は学会事務所(LEN03210@nifty.com)までお知らせください。

定款施行細則第13条の変更案(下線が追加する条文)

- 第13条 理事および監事の選出に際して、選挙管理委員会は選挙用会員名簿を配布する。
- 2 選挙用会員名簿には、正会員の姓名を記載し、支部ごとに50音順に配列する。
 - 3 定款に定めるところの役員を連続して2期務めた正会員については、次の1期に限りその被選挙権を停止する。監事を通算して2期務めた正会員については、監事の被選挙権を停止する。選挙管理委員会は、前項の規定にもかかわらず、本項の規定に基づいて選挙用会員名簿に当該者の被選挙権の停止を明示する。
 - 4 定款に定めるところの役員を通算して8期以上務めた正会員は、選挙の度ごとに本人の希望によりその1期に限り

その理事の被選挙権を休止することができる。この希望は書面で選挙管理委員会に申し出ることとし、選挙管理委員会は、前々項の規定にもかかわらず、この申し出に基づいて選挙用会員名簿に当該者の被選挙権の休止を明示する。(以下略)

最新メールアドレス登録のお願い

現在、本学会では学会からのご連絡・ご案内を郵送のみに頼っている現状を改善し、電子メールによる、より細やかで速やかなご連絡・ご案内を実現すべく、最新のメールアドレスの収集を行っています。メールアドレスを既に事務局にお届けいただいている方や名簿にメールアドレスが掲載されている方も、既に使用されていない等のため届かない場合が少なくありません。

連絡先に変更のあった方は、最新のメールアドレス等を「東洋音楽学会会員名簿情報登録フォーム」にてご登録ください。学会Web→「会員の皆様へ」から、またスマホやタブレット端末からは下記のQRコードから登録ができます。

会報等のメール配信(郵送停止)に関するアンケートも、このフォームに掲載しています。第5次に引きつづき、メール配信希望を募っております。なお変更届は、メールやファックスにても学会事務所(LEN03210@nifty.com/03-3832-5152)にて受け付けます。



また運用試行を始めた情報交換MLへの参加も募っております。詳細は、学会ウェブサイトをご覧ください。

第40回田邊尚雄賞アンケートのお願い

第40回田邊尚雄賞選考委員会では、新刊情報を広く収集しています。会員の業績を顕彰する貴重な機会ですので、著作物を出版される際は、選考委員会までお早めにお知らせ下さい。自薦のほか他薦も歓迎いたします。

選考対象：2022年1月1日～12月31日の発行物

締め切り：2023年2月3日(金) 正午

記入事項：著者名、書名、発行年月日、発行所名。

なお、論文の場合は、掲載誌名・巻次・編集者名・論文頁数も記して下さい。推薦理由を簡潔にお書き添えいただいても構いません。

▶送付先：東洋音楽学会 第40回田邊尚雄賞選考委員会
(郵送)〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル307号
(Fax) 03-3832-5152
(電子メール) LEN03210@nifty.com
※ご連絡の受け取り確認などは遅れる可能性もあります。

文化庁長官
都倉 俊一 殿

令和4年12月13日
東洋音楽学会会長
小塩さとみ

選考委員：飯野りさ(委員長)、高松晃子、金城厚、
千葉優子、野川美穂子

会員の受章・受賞

◇時田アリソンさんが旭日小綬賞を受章

令和5年秋の叙勲に際して、会員の時田アリソンさんが、日本・オーストラリア間の学術交流及び相互理解の促進に寄与したことに對して、旭日小綬賞を受章されました。

◇金志善さんの著書が2022年世宗図書学術部門選定図書に選定

本学会会員の金志善さんのご著書『植民地朝鮮の西洋音楽の受容と日本人の音楽活動』(原題: 식민지 조선의 서양음악 수용과 일본인의 음악활동, 2021年、ソウル: 民俗苑)が、大韓民国文化体育観光部主催 2022年世宗図書学術部門選定図書に選ばれました。

文化庁芸術祭参加公演募集並びに贈賞終了について

文化庁長官への要望書提出について

11月12日に国際基督教大学で開催された第11回定時社員総会において、審議事項「その他」として、会員の薦田治子氏より「文化庁の芸術祭贈賞廃止について、日本の伝統音楽への影響が大きいので、学会として文化庁に意見表明をしてほしい」という発議がありました。総会議長である福岡正太会長より「次の理事会に検討を委ねたい」との回答があり、翌13日の大会終了後に開催された臨時理事会において対応を協議しました。本学会にとって重要な事項であると判断し、発議者から詳しい内容を確認した上で、学会としてではなく、会長の個人的な意見表明という形で以下のような要望書を提出することとしました。

文化庁芸術祭参加公演募集並びに贈賞終了に対する要望書

文化庁芸術祭参加公演募集並びに贈賞が今年度で終了する旨の文章が、文化庁芸術祭のホームページ上で追記の形で公表されたことを知り、大変驚いています。芸術祭の参加公演および贈賞は、幅広いジャンルを対象とした制度であり、演奏家に活動の目標を与え、一般観客・聴衆には優れた芸術に接する機会を与えることで、日本の芸術水準の向上と活性化に大きく貢献してきたと理解しています。このような優れた制度が、理由の公表や後継・代替制度の提示なしに、その終了のみが発表されたことに對して、東洋音楽学会の会長として遺憾の意を表明します。

時代の変化に伴い制度変更が必要となったのかもしれませんが、文化政策は長期的な視点で行うことが重要であり、これまでの芸術祭参加公演や贈賞制度を継続的に生かすことが必要だと考えます。特に本学会と関わりの深い日本の伝統音楽に関しては、芸術祭の贈賞制度が継承者育成に大きな役割を果たしてきました。そのため、突然の制度終了の打撃は非常に大きなものであると憂慮しています。

以上のような理由から、芸術祭の参加公演募集並びに贈賞終了の決定に對して、東洋音楽学会会長として下記の要望をお伝えします。

記

1. 芸術祭贈賞制度の終了についての周知を要望します。

日本の伝統音楽の分野で意欲的な若手・中堅の演奏家にとって、芸術祭参加は重要なキャリア形成の機会であり、将来的な参加を計画していた人も多いはずですが、芸術祭参加を前提に演奏会の準備をしてきた演奏家にとって、突然の贈賞終了は、精神的にも経済的にも大きな影響があります。贈賞終了をまだ知らない演奏家が多数いますので、SNSなどを活用して、この制度が令和4年度で終了したことを広範囲に知らせてください。制度終了の理由についても、演奏家が納得できる説明が付されることをあわせて要望します。

2. 芸術祭贈賞終了後の新しい制度に関しては、ジャンルごとのきめ細やかな代替制度での対応を要望します。

芸術祭賞は多くの分野に関わる賞である点が特徴でした。

西洋音楽分野では概して認知度が低い印象がありますが、日本の伝統音楽分野では芸術選奨や重要無形文化財などの顕彰に直結するケースも多く、若手・中堅演奏家がベテランの仲間入りをするために大きな役割を果たしてきました。ジャンルごとに審査委員や参加経験者からの聞き取りを行い、各ジャンルに必要な代替制度を作ることを要望します。ジャンルの区分を廃止して一律の基準で贈賞を行うと、日本のもつ芸術文化の多様性が失われ、特定分野のみに賞が偏ることが予測されます。ジャンルや地域による不公平が生じないように、審査員の数や得意分野、居住地域などにもきめ細やかな配慮をお願いします。

加えて、これまでの芸術祭の精神を生かした新しい制度を十分な検討のもとで作るよう要望します。音楽部門に関しては、演奏や企画の質の向上につながる制度の構築を要望します。芸術選奨のように、多種多様の多数の演奏会の中から賞を受けることは宝くじに当たるようなもので、運の良し悪しに左右されるため演奏家にとって実現可能な目標にはなりにくいと思われまふ。演奏家が演奏の質を向上させたいと考える動機に直結するよう、例えば、必ず審査の対象となる特別枠を設けるなど、若手・中堅演奏家にとって到達可能な目標となるような制度を要望します。

3. 若手・中堅演奏家に対するキャリア形成の機会が失われることがないよう、日本の伝統音楽に関しては、芸術祭参加公演・贈賞制度を引き継ぐ制度を至急整備することを要望します。

日本の伝統音楽の世界では、芸術祭の贈賞以外に、若手・中堅演奏家のキャリア形成を後押しする制度がほとんどありません。西洋芸術音楽では、コンクールがキャリア形成のための重要な場となっていますが、日本の伝統音楽の場合、コンクールの開催状況はジャンルにより大きく異なります。またコンクールは技術向上のモチベーションや、当該ジャンルの活性化には有効ですが、ジャンルが細分化し、流派ごとに演奏スタイルも異なる日本の伝統音楽の場合、キャリア形成にはほとんど結びつきません。コンクールの多くが子供を対象とするか、イベント的要素が強いのも、上記のような日本音楽の特徴と関係しています。

芸術祭の参加公演に応募し、「芸術祭参加」と銘打った演奏会を開催することが、日本の伝統音楽の世界ではキャリア形成の一つとして社会的に認められてきました。加えて、「新人賞」「優秀賞」「大賞」と段階的にキャリアを積み上げていく制度となっていたことが、若手・中堅演奏家にとって大きな意味を持っていました。文化庁のホームページには「来年度(令和5年度)以降は、優れた芸術文化活動を行う個人を顕彰する制度をより充実させる方向で検討して参ります」とありますが、日本の伝統音楽に関しては、芸術祭の贈賞と同様

に「新人賞」「優秀賞」「大賞」のように演奏家のキャリア段階と対応した賞を設置するよう強く要望します。またジャンルによっては個人への贈賞が難しい場合もあります。これまでの芸術祭の贈賞でも、日本の伝統音楽では、演奏団体や複数の演奏家が受賞した例があります。贈賞の対象を個人に限定しない形で後続の贈賞制度をつくるよう要望します。

以上

会費納入のお願いと会費割引制度のお知らせ

1. 会費納入のお願い

2022年9月から新しい年度(2022年度)が始まりました。会費未納の方は、金額をお確かめの上お払くださいますよう、お願い申し上げます。振込用紙を紛失された場合は、下記学会口座宛にお振ください。なお、本会報と入れ違いに納入された場合はどうぞご容赦ください。

正会員：8000円

学生会員(大学院生を除く)、および割引申請者：6000円

○郵便局からの払込

ゆうちょ銀行[口座番号]00160-6-55723 [加入者名]一般社団法人東洋音楽学会

○他金融機関からの振込

ゆうちょ銀行[支店名]〇一九(ゼロイチキョウ)店(019)
[当座]0055723

○オンライン決済サービスによる納入

ペイパル(PayPal)によるオンライン決済も会費が納入できます。学会ウェブサイトのトップページ(<http://tog.a.la9.jp/>)の「入会方法はこちら」をクリックし、「入会方法」のセクションをご覧頂くと納入ボタンがあります。オンライン決済にはペイパルへのログインが必要です。ペイパル・アカウントをお持ちでない方は、アカウントを開くと送金できます(アカウント開設費無料)。なお、オンライン決済には手数料が発生するため、納入金額は以下のようになります。

正会員：8350円

学生会員(大学院生を除く)、および割引申請者：6280円

2. 会費割引制度のお知らせ

本学会には、夫婦・親子割引、大学院生(博士課程・修士

課程)・研究生割引)の制度があります。それぞれ条件や申込方法が異なります。

学会のホームページ (<http://tog.a.la9.jp/about.html#7>) でご確認の上、お申し込みください。なお、大学院生の割引制度を受けるためには「大学院生会費減額措置願ひ」と学生証のコピーを、また研究生の割引制度を受けるためには、「研究生会費減額措置願ひ」と学生証のコピー、履歴書が必要です。次年度以降も継続して減額措置を希望する場合は、毎年、前年度末すなわち8月31日までに、「減額措置願ひ」を提出する必要があります。

3. 会費の滞納者へのご注意

滞納がありますと、会員の権利(研究会・大会での発表、学会の発行物の受取)が行使できないことがありますのでご注意ください。

4. 卒論・修論の発表者へのご注意

発表を機に入会された会員にも、新年度の会費納入義務が発生いたします。退会するためには退会届が必要です。その旨ご了解のうえ、会費の納入にご協力ください。

機関誌編集委員会からのお知らせ

◇『東洋音楽研究』「投稿規定」と「投稿の手引き」について

機関誌編集委員会では、機関誌の最新号87号に「投稿規定」とともに少し改訂した「投稿の手引き」を掲載しました。これまで機関誌には「投稿規定」のみ掲載され、「投稿の手引き」は学会のホームページ上でしか見られませんでした。機関誌上でも見られるようになりました。今後の投稿につきましては、ホームページ上でも、機関誌上でも「投稿の手引き」をご覧いただけますので、「投稿規定」および「投稿の手引き」を参照の上、ご執筆をお願い申し上げます。

東日本支部からのお知らせ

1. 定例研究会発表募集(7月例会)について

東日本支部では、2023年7月1日(土)の定例研究会(オンライン開催)における研究発表を募集しています。

発表を希望される方は、発表種別(研究発表・報告等)、発表題目、要旨(800字以内)、氏名、所属機関、連絡先(住所、電話、E-mail)を明記の上、4月29日(土)までに、東日本支部事務局あてにメールでお申し込みください。発表希望の提出後1週間を経ても東日本支部事務局から連絡がない場合

には、メール事故等の可能性がありますので、お手数ですが、再度ご連絡ください。

なお、7月例会を含めて2023年12月までの全例会は、原則オンライン開催を継続する方針です。

2. 「会員の声」投稿募集

東日本支部発行『東日本支部だより』には、会員の皆様からの情報を掲載する「会員の声」欄を設けています。研究会、講演会、展示会など、会員の活動に関連する情報がありましたら、東日本支部事務局あて、お知らせください。投稿方法は、以下の通りです。

1) 次号締切: 2023年2月10日(3月上旬発行予定)

2) 原稿の送り先: 東日本支部事務局

tog.higashi@gmail.com

3) 字数・書式: 25字×8行以内(投稿者名明記のこと)

4) 内容:

①催し物、出版物などの情報

研究会、講演会、演奏会、CD、DVD、書籍出版、展示、見学会など

②学会への要望や質問

支部例会、大会、機関誌など、学会に対する感想や要望。

*原稿の採否は「支部だより」担当者にご一任ください。編集の都合上、お送りいただいた原稿に多少手を加えさせていただきますことがありますので、ご了承ください。

西日本支部からのお知らせ

◇定例研究会

徐々に対面を復活させますが、オンライン併用を可能な限り続けることにします。今後の日程は、第294回定例研究会(2023年2月18日、九州大学)、第295回定例研究会(2023年3月上旬、京都市立芸術大学)、第296回定例研究会(2023年5月・6月頃、京都市立芸術大学)となっております。詳しい内容を随時、ウェブサイトにあげます。ご確認ください(「東洋音楽学会 西日本支部」で検索)。

例会での発表を希望される方は、西日本支部事務局(支部長個人)あてに電子メールでお申し込みください。返信がない場合、繰り返し督促してください。

◇支部だよりについて

西日本支部が刊行する『西日本支部だより』97号が、お手元に届いていると思いますが、97号をもって、紙媒体の『西日本支部だより』を廃止し、ウェブサイト上のみの刊行とすることを、支部委員会で決定いたしました。98号は1月末に、

99 号は 4 月に、100 号は 9 月に刊行の予定です。ウェブサイトを確認してください(「東洋音楽学会 西日本支部」で検索)。なおひきつづき紙媒体の送付を希望される方は、西日本支部事務局まで連絡ください。

西日本支部事務局：

〒610-1197 京都市西京区大枝沓掛町 13-6

京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター

藤田隆則研究室気付

電話/Fax. 075-334-2392

電子メール (藤田隆則) : tfujita@kcua.ac.jp

ア研究連絡協議会は、日本における、東洋(アジア)の古代から現代に至る諸文化を、それぞれの専門性から研究している学協会が、この分野の将来における一層の振興を図り、相互の学術交流、学術行政に対する提言、国際的な研究動向に対応するために設立された協議会で、現在 30 を超える学協会が参加しています。同協議会の詳細はウェブサイト <http://www.tohogakkai.com/kyogikai.html> をご参照ください。なお、同協議会ではシンポジウム等を行なっています。シンポジウム等が開催される際には、会報や学会ホームページでお知らせします。

沖縄支部からのお知らせ

◇定例研究会について

第 79 回定例研究会は、2023 年 2 月を予定しております。詳しい内容は、決まり次第、学会ホームページに掲載します。また、学会員以外の方々も聴講可能ですので、奮ってご参加ください。

第 80 回定例研究会は、2023 年 6 月を予定しています。発表希望者を随時受け付けております。発表を希望される方は、開催予定の 4 か月前までをめぐに、発表種別 (研究発表・報告等)、発表題目、要旨 (800 字以内)、氏名、所属機関、連絡先を明記の上、沖縄支部 (okinawashibu.toyo@gmail.com) まで出来るだけメールでお申し込みください。発表希望のメールを送信後、1 週間を経ても沖縄支部から連絡がない場合には、お手数ですが再度ご連絡ください。開催方法は、コロナ等の状況を鑑み検討いたします。他支部会員の発表も歓迎致します。

沖縄支部事務局：

〒903-8602 沖縄県那覇市首里当蔵町 1-4

沖縄県立芸術大学音楽学部 小西研究室気付

Tel/Fax 098-882-5016

メールアドレス : okinawashibu.toyo@gmail.com

東洋学・アジア研究連絡協議会への参加について

本学会は、平成 17 年に設立された東洋学・アジア研究連絡協議会に、設立当初よりオブザーバー参加をしておりましたが、このたび芸術学関連学会連合を退会したことをうけて、同協議会へ正式に参加することになりました。東洋学・アジ

ICTM (国際伝統音楽学会)に関するお知らせ

1. 第 47 回 ICTM 世界大会のお知らせ

第 47 回 ICTM 世界大会 (於：ガーナ) は、下記の要領で開催されることになりました。2021 年に開催予定だった第 46 回世界大会 (於：ポルトガル) が、新型コロナウイルスの影響で 2022 年に延期されたため、2 年連続での世界大会開催となります。

日程：2023 年 7 月 13 日～19 日

開催地：ガーナ大学 (レゴン)

テーマ：

- 1) African Music and Dance: Past, Present, and Future Approaches to Research
- 2) Decolonization in Music and Dance Studies
- 3) Music, Dance, and Well-Being: Impacts from and Responses to the COVID-19 Pandemic
- 4) Gender and Sexuality in Global Music and Dance
- 5) Popular Music, Dance, and Activism
- 6) Conflict and Peace-Making through Music and Dance
- 7) Exploring the Materials of Music and Dance: Instruments, Bodies, Technologies
- 8) New Research

各テーマの詳細は、ICTM のウェブサイト (<http://ictmusic.org/ictm2023/>) をご覧ください。なお、発表募集はすでに締め切られました。

2. 第 7 回 ICTM 東アジア音楽研究会シンポジウム日本開催のお知らせ

ICTM 東アジア音楽研究会 (Study Group on Musics of

East Asia = MEA) の第7回シンポジウムが2024年の夏に日本で開催されます。

日程：2024年8月23日～25日

開催地：国立民族学博物館

本大会は、国立民族学博物館と東洋音楽学会の共催により行われます。詳細は追ってお知らせいたします。

現地大会実行委員 (Local Arrangement Committee 敬称略、五十音順)：

小塩さとみ、マット・ギラン、寺田吉孝、福岡正太、
福岡まどか、劉麟玉、早稲田みな子

3. 新ICTM 担当委員のお知らせ

2022年度より、マット・ギラン氏が東洋音楽学会 ICTM 担当委員を担当して下さることになりました。

4. Yearbook for Traditional Music バックナンバーのオンライン・アクセスについて

ICTM 会員の特典として、学会誌 Yearbook for Traditional Music のバックナンバー (1981年～現在)、および同誌の前身である Yearbook of the International Folk Music Council (1969-1980) と the Journal of the International Folk Music Council (1949-1968) のバックナンバーがオンライン上で無料閲覧できます。ぜひご利用ください。閲覧方法は以下の通りです。

- ①ICTM のウェブサイト (<http://ictmusic.org/>) にログインする。
- ②左側に出てくる “Member Service” のメニューから “Your Account” を選択する。
- ③ “Benefits for members in good standing” の一覧から “Access the Yearbook for Traditional Music at Cambridge Core” を選択する。
- ④Yearbook for Traditional Music のトップページが開き、検索ウィンドウが現れる。
- ⑤検索ウィンドウにキーワードや著者名を入力して論文検索ができる他、その下にあるメニューから、最新号は “latest issue”、その他のバックナンバーは “all issues” をクリックして閲覧が可能。
- ⑥記事の一覧が表示されたら、閲覧したい論文にチェックを入れ、左側のメニューの “Actions for selected content” から

PDF ダウンロード、あるいは Kindle や Google Drive への転送などが可能。

早稲田みな子

RILM(音楽文献目録)委員会からのお知らせ

◇『音楽文献目録オンライン』の状況

『音楽文献目録オンライン』では、既刊の『音楽文献目録』47号(2019年6月までの文献を掲載)を Web で公開しています。それ以降、事務局に情報が届いた文献について、2022年6月に選定された分までの文献が Web で公開されています。現在、46号以前の遡及入力も進めており、今後、会員の皆様には過去の目録も含めて検索・閲覧できるようになります。

また、『音楽文献目録オンライン』上の広告は2022年4月1日から開始し、現在2件掲載していますが、広告枠にはまだ余裕があり引き続き募集(5000円～)しています。なお、冊子体による遡及入力のための基金を募集しており、今年度、当学会からも3万円の寄付をいただくことになりました。引き続き、ご協力をよろしくお願いいたします。

◇東洋音楽学会会員の『音楽文献目録オンライン』へのアクセス

本学会 HP に表示される「音楽文献目録オンライン」をクリックした後、下記の ID とパスワードを入力してアクセスしてください。

個人情報のため削除

会員異動

個人情報のため削除

個人情報のため削除

◆登録事項の変更先

学会ウェブサイトの「東洋音楽学会会員名簿情報登録フォーム」をご利用いただくか、学会事務局宛
(LEN03210@nifty.comまたはFax 03-3832-5152) まで
お知らせください。

図書・資料等の受贈

(2022年8月～11月、到着順)

『楽道』8,9,10,11月号 (公財)正派邦楽会

『楽器コレクション管理資料集5 活動報告編』

2021年度版国立音楽大学楽器学資料館

『日本音楽学会会報』第116号 日本音楽学会

『日本伝統音楽研究』第19号

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター

『一音成佛』第51号 虚無僧研究会

『雅楽だより』第71号 雅楽協議会

『音楽学』第68巻1号 日本音楽学会

新刊書籍

(ゴシック体の項目は賛助会員による刊行物)、価格(税込)

- 『伊英独仏 音楽用語辞典』 篠岡恒悦、春秋社、4,950円
- 『イツァーク ヴァイオリンを愛した少年』
トレーシー・ニューマン(著)、アビゲイル・ハルピン(絵)、
廣津留すみれ(訳)、音楽之友社、1,980円
- 『1冊でわかるポケット教養シリーズ 日本の作曲家 團伊
玖磨』 原伸夫と新・3人の会(著)、團紀彦(監修)、
ヤマハミュージックエンタテインメントホールディングス、
1,045円
- 『1冊でわかるポケット教養シリーズ 日本の作曲家 伊福
部昭』 小林淳、ヤマハミュージックエンタテインメントホ
ールディングス、1,045円
- 『1冊でわかるポケット教養シリーズ 日本の作曲家 富田
勲』 妹尾理恵(監修)、ヤマハミュージックエンタテインメ
ントホールディングス、1,045円
- 『1冊でわかるポケット教養シリーズ 日本の作曲家 服部
良一』 服部音楽出版(監修)、ヤマハミュージックエンタテ
インメントホールディングス、1,045円
- 『ヴィンテージ・ピアニストの魅力』
青柳いづみこ(著)、アルテスパブリッシング、2,200円
- 『英国音楽大全 「イギリス音楽」エッセイ・評論&楽曲解
説集』 三浦淳史(著)、音楽之友社、3,960円
- 『音楽学への招待 春秋社音楽学叢書』
沼野雄司、春秋社、2,860円
- 『音楽家、指導者、フリーランスのための確定申告・税金ガ
イド』 栗原邦夫、音楽之友社、1,540円
- 『音楽とは ニコラス・クックが語る5つの視点』
ニコラス・クック(著)、福中冬子(訳)、音楽之友社、2,970円
- 『音楽と人のサイエンス』
デール・パーヴス(著)、小野健太郎(訳)、徳永美恵(訳)、
ニュートンプレス、1,660円
- 『音楽のある部屋 ディレクターの流儀』
伊藤光昌、春秋社、2,420円
- 『音楽の授業でタブレットをどう使う?』
小梨貴弘ほか、音楽之友社、2,200円
- 『音楽は絶望に寄り添う ショスタコーヴィチはなぜ人の心
を救うのか』 スティーブン・ジョンソン(著)、
吉成真由美(訳)、河出書房新社、2,915円
- 『音大入試の「楽典」 解き方のコツ&過去問トレーニング』
菅原真理子(監修)、菅原真理子、井上ゆり子、
堀優香、辻田絢菜(著)、音楽之友社、1,870円
- 『カーザ・ヴェルディ ～世界一ユニークな音楽家のための
高齢者施設～』 藤田彩歌、ヤマハミュージックエンタテイ
ンメントホールディングス、2,090円
- 『合唱音楽と政治運動』 高野幹英、柘植書房新社、2,200円
- 『近世歌文集(下)』

鈴木淳(校注)、中村博保(校注)、岩波書店、10,780円
『鍵盤ハーモニカの教科書』
 妹尾美穂(著)、音楽之友社、2,200円
 『心を動かす作曲入門』上田起士、ヤマハミュージックエン
 タテインメントホールディングス、1,045円
 『今昔物語集索引』 小峯和明(編)、岩波書店、10,450円
 『正倉院宝物に学ぶ4』
 奈良国立博物館(編)、思文閣、4,180円
『ショパン プリンス・オブ・ザ・ロマンティックス』
 アダム・ザモイスキ(著)、大西直樹(訳)、楠原祥子(訳)、
 音楽之友社、3,960円
 『世界の音 楽器の歴史と文化』郡司すみ、講談社、1,155円
 『世界の音楽大図鑑 [コンパクト版]』
 ロバート・ジューラー(監修)、金澤正剛(監修)、
 河出書房新社、4,950円
『チェンバロ大事典』
 日本チェンバロ協会(編)、春秋社、5,500円
 『近松浄瑠璃集(上)』松崎仁(校注)ほか、岩波書店、9,240円
 『中世禅宗の儒学学習と科学知識』
 川本慎自、思文閣、7,810円
『東寺百合文書 第十五巻』
 京都府立京都学・歴史館(編)、思文閣、15,400円
『日本近・現代史研究入門』
 松沢裕作(編)、高嶋修一(編)、岩波書店、3,960円
『日本古代氏族研究叢書5 蘇我氏の研究 普及版』
 平林章仁、雄山閣、4,400円
『日本のヴァイオリン史』 梶野絵奈(著)、青弓社、2,200円
『日本の近代仏教 思想と歴史』
 末木文美士、講談社、1,298円
『日本霊異記』 出雲路修(校注)、岩波書店、5,830円
『百人一首』 江橋崇、法政大学出版局、3,850円
**『フィギュアスケートと音楽 さあ、氷上芸術の世界へ
 (ONTOMO MOOK)』** 町田樹(監修)、音楽之友社、2,420円
『フランツ・リスト 深音の伝道師』
 三宮麻由子(著)、アルテスパブリッシング、1,980円
『僕たちの音楽案内 いま、音楽を語らうために』
 榊原光裕、宮城純一、荒川弥男、佐藤聡子、
 エンジェルパサー、2,200円
『保元物語 平治物語 承久記』
 栃木孝惟(校注)、日下力(校注)、益田宗(校注)、
 久保田淳(校注)、岩波書店、10,450円
『マリス・ヤンソンス』
 マルクス・ティール(著)、小山田豊(翻訳)、春秋社、3,630円
『光豊公記』
 京都大学文学部日本史研究室(編)、思文閣、16,500円

『室町社会の騒擾と秩序 [増補版]』
 清水克行、講談社、1,859円
『リズムの本 Sollasis Rhythm book 巻次:1』
 藤田史字(編著)、Sollasis、1,540円
『リズムの本 Sollasis Rhythm book 巻次:2』
 藤田史字(編著)、Sollasis、1,540円
『リズムの本 Sollasis Rhythm book 巻次:3』
 藤田史字(編著)、Sollasis、1,540円

新発売視聴覚資料

●CD

『雅楽への招待 [実用編]』
 東京楽所、COCJ-41822、2,750円
『講談名人名演集』 浜野矩随ほか、COCJ-41785、2,200円
『尺八 オリエンタル・ムードをうたう』
 村岡実、COKM-44039、配信限定
『女流講談名作集』 神田陽子ほか、COCJ-41786、2,200円
『箏曲 正派邦楽会 奥田雅楽之一作品集』
 奥田雅楽之一ほか、VZCG-842、3,300円
『中島勝祐創作賞 第十一回 散華幻想～のちの静～』
 東音越智義乃、中島勝祐、VZCG-843、3,300円
**『ひとときの二胡ベスト ～ほっとひといきつきたいあなた
 ～～』** 汪承躍ほか、COCJ-41915、2,200円
『広島吟詠(令和4年盤)』
 澁田光玲ほか、COCJ-41784、2,273円
『フランスこどものうた <石井好子・生誕100周年>』
 石井好子ほか(訳)、KICS-4078、2,200円
『ふるりの民謡 第62集』
 谷島明世ほか、KIBM-5009、7,590円
『雅 ～芝祐靖 笛の世界～』 芝祐靖、COCJ-41823、2,750円

編集後記

会報第 117 号をお届けします。今号は昨年 11 月に開催された本学会大会のレポートが中心となります。レポート掲載では多くの会員の方に執筆のご協力をいただき、多彩で充実した内容となりましたこと、改めて御礼申し上げます。国際基督教大学を会場とする今大会はオンライン参加と対面参加による初のハイブリッド開催で、また発表にはオンデマンド参加もあるなど、参加形態の多様化の加速を実感いたしました。参加者には便利な反面、大会実行委員会の皆様には大変なご負担となりました。それにもかかわらず、レポート記事作成のため両日の動画・写真のご提供をいただき、心より感謝申し上げます。

前号で掲載いたしましたでしたが、会報上の個人情報が流出しましたこと、重ねてお詫び申し上げます。この反省のもとに、今号より、個人情報については氏名と所属のみを記すことにしましたので、少し不便になりますが、どうかご理解ください。

先の総会議決のとおり、広報担当の理事も交代となり、次号より増野・土田両理事の担当となります。また委員の山下正美さんには今号で退任となります。山下さんの長きにわたるご協力に感謝申し上げます。今後、新体制による会報編集委員会が担ってまいりますので、引き続き、よろしくご協力・ご支援のほどお願い申し上げます。 澤田篤子

会報編集委員会

理事：澤田篤子、増野亜子(継続)、土田牧子(新)

委員：山下正美、山本華子

参事：井上環、今泉佳奈、神田花菜子、西浦(土田)まどか、
吉岡倫裕

第11回定時社員総会議事録(抄)・添付書類

1.日時:令和4年11月12日(土)17:15-18:30

2.場所:国際基督教大学D館オーディトリアム及びweb会議システムZoom

3.出席者:291名(委任状提出者122名、書面議決書提出者117名を含む)

〔備考〕正会員518名、定足数259名

4.議事事項と審議の経過及び結果

定款第19条により福岡正太会長が議長となり、定足数を確認の上、開会を宣言した。次いで定款施行細則第16条により副議長を要請し、山本華子・明木茂夫両氏が選出された後、以下の議事を開始した。第2号議案から第5号議案の採決は、岡崎淑子監事による「監査報告書」[添付書類8]の説明の後に行われた。

第1号議案 役員選任の件

永原恵三選挙管理委員長より「役員選出資料」[添付書類1]について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

第2号議案 令和3年(2021年)度事業報告の件

遠藤徹理事(総務担当)より「令和3年(2021年)度事業報告」[添付書類2-1]「処務の概要」[添付書類2-2]について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

第3号議案 令和3年(2021年)度収支決算の件

植村幸生理事(経理担当)より「令和3年(2021年)度収支計算書」[添付書類3-1]「収支計算書に対する注記」[添付書類3-2]について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

第4号議案 令和4年(2022年)8月31日現在貸借対照表および正味財産増減計算書の件

植村幸生理事により「貸借対照表」[添付書類4-1]、「正味財産増減計算書」[添付書類4-2]、「財務諸表に対する注記」[添付資料4-3]「附属明細書」[添付書類4-4]「財産目録」[添付資料4-5]について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

第5号議案 令和4年(2022年)8月31日現在会員異動状況の件

遠藤徹理事より「会員の異動状況(2021年9月1日~2022年8月31日)」[添付書類5]について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

その後、議長が議場に対して発議を促したところ、薦田治子会員より、文化庁芸術祭の贈賞が廃止される問題について、周知のための案内ならびに、学会として提言等ができないかとの意見が出された。学会からの提言にかんしては金城厚会員から過去に有志として意見提出を行った例がある旨の教示があった。議長より、本件は新理事会にて検討を進めるという方針が示された。

審議終了後、遠藤徹理事が「令和4年度(2022年度)事業計画」[添付書類6]について、次いで植村幸生理事が「令和4年度(2022年度)事業計画収支予算書」[添付書類7]について、それぞれ報告を行った。

※「令和4年(2022年)度事業計画の件」[添付書類6]、「令和3年(2021年)度収支予算の件」[添付書類7]については、『会報』第115号(2022年5月25日発行)13~15ページの「第20回通常理事会 添付書類」をご覧ください。

[第11回総会 添付書類 1]

役員選出資料

1. 2022 年度役員選挙開票結果

- (1) 有権者数 535 名（2022 年 7 月 24 日現在）
- (2) 被選挙権停止者数 9 名
- (3) 被選挙権休止者数 11 名
- (4) 投票用紙発送日 2022 年 7 月 24 日（日）
- (5) 投票締切日 2022 年 9 月 1 日（木）消印有効
- (6) 開票日時 2022 年 9 月 8 日（木）午前 10 時より午後 6 時
- (7) 開票場所 放送大学東京足立学習センター講義室 1
- (8) 開票に立ち会った会員数 0 名
- (9) 投票者数 150 名（投票率 28%）
- (10) 有効封筒数 146 通（無効投票 4、内訳：無記名 3、締切後消印 1）
- (11) 開票結果

①監事

総票数 292票

有効投票数 291票 無効投票数 1票 白票 27票

順位	得票数	氏名
当選 1	27票	岡崎 淑子
当選 2	21票	澤田 篤子
次点 3	13票	小柴 はるみ
4	8票	横井 雅子
5	7票	大谷 紀美子
5	7票	久保田 敏子
5	7票	酒井 正子
8	5票	岩井 正浩
8	5票	遠藤 徹
8	5票	早稲田 みな子

（5票未満省略）

②理事

総票数 1168票

有効投票数 1165票 無効投票数 3票 白票 86票

順位	得票数	氏名
----	-----	----

当選1	58票	小塩 さとみ
当選2	47票	遠藤 徹
当選3	43票	早稲田 みな子
当選4	36票	藤田 隆則
当選5	35票	増野 亜子
当選6	30票	小日向 英俊
当選7	29票	竹内 有一
当選7	29票	福岡 まどか
9	26票	澤田 篤子
当選10	24票	梅田 英春
当選10	24票	小西 潤子
次点12	20票	高松 晃子
13	19票	近藤 静乃
14	18票	ギラン, マット
15	15票	岡田 恵美
15	15票	土田 牧子
15	15票	配川 美加
15	15票	横井 雅子
19	14票	井口 淳子
20	12票	井上 貴子
20	12票	千葉 優子
20	12票	三島 わかな
23	11票	大内 典
23	11票	葛西 周
23	11票	ゴチェフスキ, ヘルマン
23	11票	島添 貴美子
23	11票	寺田 吉孝
23	11票	ネルソン, スティーヴン G.

（1 1 票未満省略）

2. 選出過程

① 選出方法

理事・監事の選出については、定款施行細則第 3 条から第 13 条までの各条に準拠し、選挙管理委員会の定める選出要項に基づいて行われた。

② 監事の選出

9 月 8 日に①の通り開票を行い、集計結果を出した。

③ 理事の選出

9 月 8 日に①の通り開票を行い、集計結果を出した。定款施行細則第 11 条に定めるところにより、理事および監事として重複して選ばれた澤田篤子については、監事として選ばれた者と認めた。その結果、理事については澤田篤子を除く上位 10 名を当選者とした。これらの選出者、順位、票数を付記した結果は、最高得票者および会長に報告した。また、その結果は最高得票者を通して選出理事にも知らされた。

定款施行細則第 8 条に基づき、選挙管理委員会は、理事当選者 10 名に対して、他の 5 名を合議することを求めた。合議の結果、高松晃子、近藤静乃、土田牧子、配川美加、横井雅子の 5 名が理事として推薦された。

3. 2022 年度役員選任原案

（1）監事 2 名

岡崎 淑子 澤田 篤子

（2）理事 15 名

梅田 英春	土田 牧子
遠藤 徹	配川 美加
小塩 さとみ	福岡 まどか
小西 潤子	藤田 隆則
小日向 英俊	増野 亜子
近藤 静乃	横井 雅子
高松 晃子	早稲田 みな子
竹内 有一	

（一社）東洋音楽学会 2022 年度選挙管理委員会

永原 恵三（委員長）
岡部 芳広（副委員長）
黒川 真理恵
福田 千絵
安原 道子

[第11回総会 添付書類2-1]

令和3年度(2021年度)事業報告

(自令和3年(2021年)9月1日 至令和4年(2022年)8月31日)

[1] 研究発表会および学術講演会の開催(定款第5条1)

(1)公開講演会の実施(定款施行細則第3条1)

- ・日時 2021年10月30日
- ・会場 国立民族学博物館 第72回大会特設サイト(オンライン開催)
- ・課題 「音楽研究とメディアの歴史と未来」

(2)研究発表大会の実施(定款施行細則第3条2)

- ・日時 2021年10月31日
- ・会場 国立民族学博物館 第72回大会特設サイト(オンライン開催)
- ・発表件数21件(共同発表を含む)

(3)次年度大会の準備

- ・日時 2022年11月
- ・会場 国際基督教大学(対面・オンライン両方で参加が可能なハイブリッド形式)

(4)定例研究会(定款施行細則第3条3)

○東日本支部

- ・回数 6回(第124回～第129回 12・2・3・4・6・7月)
- ・会場 オンライン開催
- ・内容 第38回田邊尚雄賞受賞記念講演、研究発表、卒業論文・修士論文・博士論文発表ほか

○西日本支部

- ・回数 3回(第290回～第292回 9・2・7月)
- ・会場 オンライン開催
- ・内容 研究発表、修士論文発表ほか

○沖縄支部

- ・回数 2回(第77回～第78回 3・7月)
- ・会場 オンライン開催
- ・内容 研究発表、修士論文発表ほか

[2] 学会誌および学術図書の刊行(定款第5条2)

(5)機関誌『東洋音楽研究』の刊行(定款施行細則第3条4)

○第87号の編集、刊行

- ・内容 会員の論文、研究ノート、資料、書評ほか

(6)会報の刊行

○『東洋音楽学会会報』

- ・第113号(2021年9月)、第114号(2022年1月)、第115号(2022年5月)
- ・内容 会員への諸通知、理事会・総会記録、大会開催案内、大会レポート、
図書・視聴覚資料紹介、会員消息

○『東日本支部だより』

- ・第57号(2021年11月)、第58号(2022年3月)、第59号(2022年6月)
- ・内容 東日本支部定例研究会の開催案内・報告、会員の声ほか

- 『西日本支部だより』
 - ・第95号(2022年1月)、第96号(2022年5月)
 - ・内容 西日本支部定例研究会の開催案内、定例研究会の記録ほか
- 『沖縄支部通信』(Webのみで公開)
 - ・第45号(2022年3月)、第46号(2022年7月)
 - ・内容 定例研究会記録
- 〔3〕関連学協会との連絡および協力(定款第5条3)
- (7)日本学術会議への協力
- 日本学術会議協力学術研究団体として協力
- (8)音楽文献目録委員会への参加
- 会員三名を委員として派遣
- (9)国際伝統音楽学会(ICTM)への協力
- 日本国内委員会として加盟
- (10)藝術学関連学会連合への参加
- 会員一名を委員として派遣(2022年3月末に退会)
- (11)東洋学・アジア研究連絡協議会への参加
- オブザーバーとして参加
- 〔4〕研究の奨励および研究業績の表彰(定款第5条4)
- (12)「田邊尚雄賞」(定款施行細則第3条5)
- 第38回田邊尚雄賞の授賞
 - ・日時 2021年10月30日
 - ・受賞者および授賞対象
小尾淳『近現代南インドのバラモンと賛歌—バクティから芸術、そして「文化資源」へ—』
2020年2月21日発行、東京：青弓社、ISBN978-4-7872-7428-1
前島美保『江戸中期上方歌舞伎囃子方と音楽』
2020年2月28日発行、東京：文学通信、ISBN978-4-909658-25-8
- 第39回田邊尚雄賞の選考と発表
 - ・受賞者および授賞対象
佐本英規『森の中のレコーディング・スタジオ—混淆する民族音楽と周縁からのグローバルリゼーション』 2021年2月15日発行、京都：昭和堂 ISBN 978-4-8122-2010-8
- 〔5〕研究および調査(定款第5条5)
- (13)国内または国外における学術調査および研究
とくになし
- 〔6〕その他目的を達成するために必要な事項(定款第5条6)
- (14)東洋音楽学会ホームページを通して行なう学会情報の提供
- (15)独立行政法人科学技術振興機構(JST)電子アーカイブ事業への参加
- (16)「人間文化研究機構国立民族学博物館との連携に関する協定」の遂行

[第11回理事会 添付書類2-2]

2. 処務の概要

[1] 役員等に関する事項

2021年度(令和3年度)末現在

職名	勤務	氏名	任期(開始)	担当職務	報酬	所属など
理事	非常勤	福岡 正太	2020/11/7	会長、総務、西日本支部担当 ※会長就任日は11/8	なし	国立民族学博物館
理事	非常勤	遠藤 徹	2020/11/7	副会長、総務	なし	東京学芸大学
理事	非常勤	尾高 暁子	2020/11/7	東日本支部長	なし	東京藝術大学
理事	非常勤	竹内 有一	2020/11/7	西日本支部長	なし	京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター
理事	非常勤	久万田 晋	2020/11/7	沖縄支部長	なし	沖縄県立芸術大学芸術文化研究所
理事	非常勤	植村 幸生	2020/11/7	常務、経理	なし	東京藝術大学
理事	非常勤	奥中 康人	2020/11/7	機関誌	なし	静岡文化芸術大学
理事	非常勤	奥山 けい子	2020/11/7	東日本支部担当	なし	日本芸術文化振興会
理事	非常勤	加納 マリ	2020/11/7	機関誌	なし	日本音楽研究家
理事	非常勤	小日向 英俊	2020/11/7	常務、総務	なし	東京音楽大学
理事	非常勤	澤田 篤子	2020/11/7	広報	なし	大阪教育大学名誉教授
理事	非常勤	田中 多佳子	2020/11/7	常務、総務、西日本支部担当	なし	京都教育大学
理事	非常勤	藤田 隆則	2020/11/7	機関誌、西日本支部担当	なし	京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター
理事	非常勤	前原 恵美 (本姓 笠原)	2020/11/7	常務、経理	なし	東京文化財研究所
理事	非常勤	増野 亜子 (本姓 城島)	2020/11/7	常務、総務、広報	なし	東京藝術大学他
監事	非常勤	岡崎 淑子	2020/11/7	監査	なし	聖心女子大学名誉教授
監事	非常勤	蒲生 美津子	2020/11/7	監査	なし	沖縄県立芸術大学名誉教授

支部委員 [東日本支部] 井上貴子、海野るみ、金志善、黒川真理恵、越懸澤麻衣、佐竹悦子、佐藤文香、田辺沙保里、デュラン ステファン・アイソル、東田範子、配川美加
 [西日本支部] 明木茂夫、岡田恵美、梶丸岳、神野知恵、藺田郁、柳沢英輔
 [沖縄支部] 遠藤美奈、古謝麻耶子、長嶺亮子

参事 [本部] 青木慧、石井紗和子、井上環(2022年4月～)、今泉佳奈、神田花菜子(2022年4月～)、柴森優花(～2022年4月)、鈴木麻菜美(～2021年10月)、土田まどか、中川優子、根本千聡、淵上ラファエル広志、松村麻由(2021年10月～)、宮武苑子、村岡南、横山洸(～2022年4月)、吉岡倫裕
 [東日本支部] 岩崎愛、小尾淳、倉脇雅子、齊藤紀子、澤田聖也(～2021年10月)、曾村みずき、武田有里、鄭曉麗、長谷川由依(2021年10月～)、増田久未
 [西日本支部] 上畑史、古澤瑞希、細野桜子、吉岡倫裕
 [沖縄支部] 小川恵祐、多和田真理

[2] 職員に関する事項

2021年度(令和3年度)末現在

職名	氏名	採用年月日	担当事務	手 当	交通費	備 考
職員	金子由美子	1997/10/22	事務一般	月額80,000円	実費支給	

〔3〕 会議等に関する事項

(1) 理事会

開催年月日	議 事 事 項	会議の結果
第19回通常理事会 2021年10月3日 (令和3)	1. 新入会員承認の件 2. 令和2年度事業報告の件 3. 令和3年8月31日現在 財務諸表の件 4. 令和2年度総括収支決算の件 5. 長期滞納者処理の件 6. 令和3年8月31日現在 会員異動状況の件 7. 参事および委員委嘱の件 8. 名誉会員推薦の件 9. 国立民族学博物館所蔵「東洋音楽学会調査記録資料」にかかる覚書の締結について 10. (1)芸術学関連学会連合からの脱退について (2)東洋学アジア研究連絡協議会への正式加盟について	承認 承認 承認 承認 承認 承認 承認 承認 承認 承認
第20回通常理事会 2022年4月10日 (令和4)	1. 新入会員承認の件 2. 令和4年度研究発表大会および公開講演会の件 3. 令和4年度事業計画の件 4. 令和4年度収支予算の件 5. 第39回「田邊尚雄賞」受賞者決定の件 6. 第40回「田邊尚雄賞」選考委員選任の件 7. 日本学術振興会育志賞の学会推薦の件 8. 長期滞納者処理の件 9. 参事および委員委嘱の件 10. 次期理事定数および支部委員定数の件 11. (1)将来構想委員会の創設の件 (2)非常勤職員(定時勤務職員)就業規則を見直す件 (3)公益目的支出計画の実施完了	承認 承認 承認 承認 承認 承認 承認 承認 承認 承認 承認 報告 報告

(2) 総会

開催年月日	議 事 事 項	会議の結果
第10回定時社員総会 2021年10月30日 (令和3)	1. 令和2年(2020年)度事業報告の件 2. 令和2年(2020年)度収支決算の件 3. 令和3年(2021年)8月31日現在貸借対照表および正味財産増減計算書の件 4. 令和3年(2021年)8月31日現在会員異動状況の件 5. 名誉会員推薦の件① 名誉会員推薦の件② ・ 令和3年(2021年)度事業計画の件 ・ 令和3年(2021年)度収支予算の件 ・ 監事が被選挙権を休止できる年期的変更を検討中 ・ 音楽文献目録委員会からオンライン利用案内	承認 承認 承認 承認 承認 承認 報告 報告 報告 報告

(3) 各種委員会 (○印は責任者)

●会報編集委員会

○澤田篤子、井上環(2022年4月～)、今泉佳奈、神田花菜子(2022年4月～)、柴森優花(～2022年4月)、土田まどか、増野亜子、山下正美、山本華子(2022年4月～)、横山洸(～2022年4月)、吉岡倫裕

●機関誌編集委員会

○奥中康人、明木茂夫、加納マリ、濱崎友絵、藤田隆則

●情報委員会

○小日向英俊、遠藤美奈、太田暁子、岡田恵美、佐竹悦子

●第39回田邊尚雄賞選考委員会

○大内典、飯野りさ、高松晃子、塚原康子、三浦裕子

●将来構想委員会(2022年4月～)

○福岡正太、植村幸生、遠藤徹、小日向英俊、田中多佳子、前原恵美、増野亜子

[第11回総会 添付書類3-1]

一般社団法人東洋音楽学会

収 支 計 算 書

令和3年9月1日から令和4年8月31日まで

(単位:円)

科 目	年度予算額	決 算 額	差 異	備 考
I 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
基本財産運用収入	700	170	530	
基本財産利息収入	700	170	530	
特定資産運用収入	200	57,658	△ 57,458	
特定資産利息収入	200	57,658	△ 57,458	
入会金収入	0	0	0	
会費収入	4,090,000	4,501,000	△ 411,000	
正会員会費収入	3,800,000	4,211,000	△ 411,000	
賛助会員会費収入	150,000	150,000	0	
特別会員会費収入	140,000	140,000	0	
事業収入	1,095,000	1,131,500	△ 36,500	
機関誌発行収入	350,000	324,000	26,000	
大会広告料収入	385,000	380,000	5,000	
大会参加費収入	360,000	427,500	△ 67,500	
懇親会費収入	0	0	0	
食料費収入	0	0	0	
その他事業収入	0	0	0	
補助金等収入	0	0	0	
負担金収入	0	0	0	
寄付金収入	0	0	0	
寄付金収入	0	0	0	
雑収入	0	346	△ 346	
受取利息収入	0	19	△ 19	
雑収入	0	327	△ 327	
他会計振替額	1,230,000	998,219	231,781	
本部会計振替収入	1,230,000	682,990	547,010	
大会会計振替収入	0	315,229	△ 315,229	
東日本支部会計振替収入	0	0	0	
西日本支部会計振替収入	0	0	0	
沖縄支部会計振替収入	0	0	0	
事業活動収入計	6,415,900	6,688,893	△ 272,993	
2. 事業活動支出				
事業費支出	6,485,000	4,941,006	1,543,994	
給料手当支出	1,200,000	1,126,665	73,335	
臨時雇賃金支出	230,000	42,000	188,000	
法定福利厚生費支出	5,000	4,049	951	
旅費交通費支出	327,000	163,026	163,974	
通信運搬費支出	1,047,000	880,002	166,998	
消耗什器備品費支出	0	0	0	
消耗品費支出	66,000	15,690	50,310	
賃借料支出	810,000	761,506	48,494	
印刷製本費支出	779,000	505,342	273,658	
諸謝金支出	260,000	70,000	190,000	
租税公課支出	10,000	600	9,400	
負担金支出	190,000	172,000	18,000	
会議費支出	26,000	1,023	24,977	
広報普及費支出	380,000	357,206	22,794	
田邊尚雄賞関連費支出	150,000	154,123	△ 4,123	
会場運営費支出	0	0	0	
機関誌作成費支出	800,000	616,668	183,332	
例会運営費支出	140,000	2,200	137,800	
懇親会費支出	0	0	0	
保険料支出	0	0	0	
事務委託費支出	0	0	0	
食料費支出(雑支出①)	0	0	0	

一般社団法人東洋音楽学会

(単位：円)

科 目	年度予算額	決算額	差異	備考
慶弔費支出(雑支出②)	20,000	29,920	△ 9,920	
手数料支出(雑支出③)	24,000	21,805	2,195	
雑支出(雑支出④)	21,000	17,181	3,819	
管理費支出	550,000	550,000	0	
事務委託費支出	550,000	550,000	0	
他会計振替額	1,230,000	998,219	231,781	
本部会計振替額	0	315,229	△ 315,229	
大会会計振替額	200,000	0	200,000	
東日本支部会計振替額	560,000	450,277	109,723	
西日本支部会計振替額	400,000	227,016	172,984	
沖縄支部会計振替額	70,000	5,697	64,303	
事業活動支出計	8,265,000	6,489,225	1,775,775	
法人税等の支払額	0	0	0	
事業活動収支差額	△ 1,849,100	199,668	△ 2,048,768	
II 投資活動収支の部				
1. 投資活動収入				
基本財産取崩収入	0	0	0	
特定基金取崩収入	1,870,000	150,000	1,720,000	
田邊尚雄賞基金取崩収入	150,000	150,000	0	
研究推進事業基金取崩収入	1,720,000	0	1,720,000	
固定資産売却収入	0	0	0	
投資有価証券売却収入	0	0	0	
敷金・保証金戻収入	0	0	0	
投資活動収入計	1,870,000	150,000	1,720,000	
2. 投資活動支出				
基本財産取得支出	0	0	0	
特定資産取得支出	0	0	0	
固定資産取得支出	0	0	0	
投資有価証券取得支出	0	0	0	
敷金・保証金支出	0	0	0	
投資活動支出計	0	0	0	
投資活動収支差額	1,870,000	150,000	1,720,000	
III 財務活動収支の部				
1. 財務活動収入				
借入金収入	0	0	0	
基金受入収入	0	0	0	
財務活動収入計	0	0	0	
2. 財務活動支出				
借入金返済支出	0	0	0	
基金返還支出	0	0	0	
財務活動支出計	0	0	0	
財務活動収支差額	0	0	0	
IV 予備費支出				
予備費支出	△ 20,900	0	△ 20,900	
当期収支差額	0	349,668	△ 349,668	
前期繰越収支差額	0	1,859,220	△ 1,859,220	
次期繰越収支差額	0	2,208,888	△ 2,208,888	

[第11回総会 添付書類3-2]

一般社団法人東洋音楽学会

収支計算書に対する注記

1. 資金の範囲について

資金の範囲には、現金預金、短期金銭債権債務、前渡金、仮払金、預り金及び前受金を含めることとしている。なお、前期末及び当期末残高は次の2.に記載のとおりである。

2. 次期繰越収支差額に含まれる資産及び負債の内訳

(単位：円)

科 目	前期末残高	当期末残高
現金預金	1,722,972	2,394,064
未収金	684,000	324,000
前渡金	200,000	206,500
仮払金	0	11,006
計	2,606,972	2,935,570
未払金	220,000	212,150
預り金	12,252	12,252
前受金	515,500	502,280
計	747,752	726,682
次期繰越収支差額	1,859,220	2,208,888

[第11回総会 添付書類4-1]

一般社団法人東洋音楽学会
(様式1-1)

貸借対照表

令和4年8月31日現在

(単位:円)

科 目	当 年 度	前 年 度	増 減
I 資産の部			
1. 流動資産			
現金預金	2,394,064	1,722,972	671,092
未収金	324,000	684,000	△ 360,000
前渡金	206,500	200,000	6,500
仮払金	11,006	0	11,006
流動資産合計	2,935,570	2,606,972	328,598
2. 固定資産			
(1) 基本財産			
定期預金	5,200,000	5,200,000	0
基本財産合計	5,200,000	5,200,000	0
(2) 特定資産			
研究推進事業基金	6,946,000	6,946,000	0
田邊尚雄賞基金	870,000	1,020,000	△ 150,000
特定資産合計	7,816,000	7,966,000	△ 150,000
(3) その他固定資産			
什器備品	7	7	0
書籍	363,500	363,500	0
差入敷金	300,000	300,000	0
電話加入権	2,000	4,000	△ 2,000
その他の固定資産合計	665,507	667,507	△ 2,000
固定資産合計	13,681,507	13,833,507	△ 152,000
資産合計	16,617,077	16,440,479	176,598
II 負債の部			
1. 流動負債			
未払金	212,150	220,000	△ 7,850
預り金	12,252	12,252	0
前受金	502,280	515,500	△ 13,220
流動負債合計	726,682	747,752	△ 21,070
2. 固定負債			
固定負債合計	0	0	0
負債合計	726,682	747,752	△ 21,070
III 正味財産の部			
1. 指定正味財産	0	0	0
指定正味財産合計	0	0	0
2. 一般正味財産			
その他一般正味財産	15,890,395	15,692,727	197,668
(うち基本財産への充当額)	(5,200,000)	(5,200,000)	(0)
(うち特定資産への充当額)	(7,816,000)	(7,966,000)	(△ 150,000)
一般正味財産	15,890,395	15,692,727	197,668
正味財産合計	15,890,395	15,692,727	197,668
負債及び正味財産合計	16,617,077	16,440,479	176,598

注記

当学会は実施事業資産として下記のを有している。

書籍 価額 363,500円

[第11回総会 添付書類4-2]

一般社団法人東洋音楽学会
(様式2-1)

正味財産増減計算書

令和3年9月1日から令和4年8月31日まで

(単位:円)

科 目	当 年 度	前 年 度	増 減
I 事業活動収支の部			
1. 経常収支の部			
(1) 事業活動収入			
基本財産運用収入	170	366	△ 196
基本財産受取利息	170	366	△ 196
特定資産運用益	57,658	82	57,576
特定資産受取利息	57,658	82	57,576
会費収入	4,501,000	4,958,000	△ 457,000
正会員受取会費	4,211,000	4,648,000	△ 437,000
賛助会員受取会費	150,000	150,000	0
特別会員受取会費	140,000	160,000	△ 20,000
事業収入	1,131,500	1,085,500	46,000
機関誌発行収入	324,000	342,000	△ 18,000
大会広告料収入	380,000	385,000	△ 5,000
大会参加費収入	427,500	358,500	69,000
懇親会費収入	0	0	0
食料費収入	0	0	0
その他事業収入	0	0	0
受取補助金等	0	0	0
受取負担金	0	0	0
受取寄付金	0	0	0
受取寄付金	0	0	0
雑収入	346	436	△ 90
受取利息	19	14	5
雑収入	327	422	△ 95
他会計振替額	998,219	816,009	182,210
本部会計振替額	682,990	566,339	116,651
大会会計振替額	315,229	249,670	65,559
東日本支部会計振替額	0	0	0
西日本支部会計振替額	0	0	0
沖縄支部会計振替額	0	0	0
経常収益計	6,688,893	6,860,393	△ 171,500
(2) 事業活動支出			
事業費	4,941,006	5,296,808	△ 355,802
給料手当	1,126,665	1,126,665	0
臨時雇賃金	42,000	7,306	34,694
法定福利厚生費	4,049	3,714	335
旅費交通費	163,026	174,640	△ 11,614
通信運搬費	880,002	790,270	89,732
消耗品什器備品費	0	0	0
消耗品費	15,690	16,811	△ 1,121
賃借料	761,506	813,164	△ 51,658
印刷製本費	505,342	599,545	△ 94,203
諸謝金	70,000	276,500	△ 206,500
租税公課	600	11,050	△ 10,450
支払負担金	172,000	187,000	△ 15,000
会議費	1,023	0	1,023
広報普及費	357,206	397,723	△ 40,517
減価償却費	0	1	△ 1
田邊尚雄賞関連費	154,123	125,120	29,003
会場運営費	0	75,000	△ 75,000
機関誌作成費	616,668	635,703	△ 19,035
例会運営費	2,200	30,000	△ 27,800
懇親会費	0	0	0
保険料	0	0	0

一般社団法人東洋音楽学会

(単位:円)

科 目	当 年 度	前 年 度	増 減
事務委託費	0	0	0
食料費(雑費①)	0	0	0
慶弔費(雑費②)	29,920	5,500	24,420
手数料(雑費③)	21,805	20,781	1,024
雑費(雑費④)	17,181	315	16,866
管理費	550,000	550,000	0
事務委託費	550,000	550,000	0
他会計振替額	998,219	816,009	182,210
本部会計振替額	315,229	249,670	65,559
大会会計振替額	0	0	0
東日本支部会計振替額	450,277	402,649	47,628
西日本支部会計振替額	227,016	144,320	82,696
沖縄支部会計振替額	5,697	19,370	△ 13,673
経常費用計	6,489,225	6,662,817	△ 173,592
評価損益調整前経常増減額	199,668	197,576	2,092
基本財産評価損益等	0	0	0
特定資産評価損益等	0	0	0
投資有価証券評価損益等	0	0	0
評価損益等計	0	0	0
当期経常増減額	199,668	197,576	2,092
2. 経常外収支の部			
(1) 経常外収益			
固定資産売却益	0	0	0
固定資産受贈益	0	0	0
経常外収益計	0	0	0
(2) 経常外費用			
固定資産売却損	0	0	0
固定資産除却損	2,000	0	2,000
固定資産減損損失	0	0	0
経常外費用計	2,000	0	2,000
当期経常外増減額	△ 2,000	0	△ 2,000
当期一般正味財産増減額	197,668	197,576	92
一般正味財産増減額	197,668	197,576	92
一般正味財産期首残高	15,692,727	15,495,151	197,576
一般正味財産期末残高	15,890,395	15,692,727	197,668
II 指定正味財産増減の部			
受取補助金等	0	0	0
受取負担金	0	0	0
受取寄付金	0	0	0
固定資産受贈益	0	0	0
基本財産評価益	0	0	0
特定資産評価益	0	0	0
基本財産評価損	0	0	0
特定資産評価損	0	0	0
一般正味財産への振替額	0	0	0
当期指定正味財産増減額	0	0	0
指定正味財産期首残高	0	0	0
指定正味財産期末残高	0	0	0
III 正味財産期末残高			
正味財産期末残高	15,890,395	15,692,727	197,668

[第11回総会 添付書類 5]

会員の異動状況（2021年9月1日～2022年8月31日）

（令和3年） （令和4年）

●：東日本支部、◆：西日本支部、■：沖縄支部、#：海外在住

会員種別	会 員 数		増減	異 動 の 内 訳
	2021. 9. 1	2022. 8. 31		
正会員	533	544	+11	新入+28、学生より+9、名誉へ-2、退会-21、逝去-3
学生会員	15	10	-5	新入+6、正会員へ-9、退会-2
賛助会員	3	3	0	
特別会員	7	6	-1	退会-1
名誉会員	1	3	+2	正会員より+2
	559	566	+7	

[第11回総会 添付書類8]

監査報告書

一般社団法人 東洋音楽学会

会長 福岡 正太 殿

令和4年10月7日

(2022年)


監事

蒲生美津子 

令和4年10月7日

(2022年)

監事

岡崎 淑子 

私たちはそれぞれ、令和3年9月1日から令和4年8月31日までの令和3年度における会計及び業務の監査を行い、次のとおり報告する。

1. 監査の方法の概要

- (1) 会計監査について、会計帳簿並びに関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きを用いて財務諸表等の正確性を検討した。
- (2) 業務監査について、理事会及びその他の会議に出席し、関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きを用いて業務執行の妥当性を検討した。

2. 監査意見

- (1) 令和3年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、正味財産増減計算書及び財産目録並びに収支計算書は会計帳簿の記載金額と一致し、法人の財産状態及び収支状況を正しく表示していると認める。
- (2) 事業報告書の内容は真実であると認める。
- (3) 理事の職務執行に関する不正の行為又は法令もしくは定款に違反する重大な事項はないと認める。

以上